

フランス・ノート

宇田川 博

1 ディジョンからリヨンへ

パリ発の TGV の座席に落ち着き、ようやく筆を取る気になる。

1週間前パリに着いた初日、ホテルのある北駅に着くまで、ぼくの心を満たしていたのは鈍重な既視感だった。メトロの内装も昔のままだし、駅舎も変わらない。パリは不変の姿――。

ところが中心地の Les Halles におりてから気分が一変した。この地区は20年前から大規模再開発が進んでいたのだから、変化は予期していたのだが。美しく整備されすぎていて人気もなく、うら寂しいのは興ざめとしても、とにかくこの一帯は大きく変わった。Sainte Eustache 教会だけが世紀を越えた姿をとどめているのを除けば。

Pierre Lescot 通りを抜け、住み慣れた Etienne Marcel 街に向かうにつれ、既視感は大きく揺らいでゆく。通りの名前はもちろん記憶しているが、まるで見知らぬ街を歩いているかのようだ。確かにこういうことは言える。長期間住んだとはいえ、メトロ駅を乗り降りして目的地に赴くことがほとんどで、一定のルート以外に足を運ぶ機会は決して多くはなかったのだと。しかも庶民的だったこの界限に高級な店が侵食して、全体の雰囲気に変化している。店の数

も増え、それぞれ色彩感覚豊かな広告を出しているの、街がずっと華やいている。

迷いながらもメトロの Etienne Marcel 駅に着いて、自分の旧居が一目で見出せないことで驚きは頂点に達した。なんと見慣れぬ風景！ その途端ぼくは弾き飛ばされたのだと思う。ただの異邦人。ただの旅人。

行きつ戻りつして旧居探しに窮し始めた頃、27という数字が脳裏に蘇った。かつての番地だ。旧居が探し当てられないとは夢にも思わず、再確認もせぬままこの街に来てしまったのだが、その天啓が働かなければ探索はもっと難航していたことだろう。方向感覚すら喪失していて、探すべくは通りの反対側だったのだ。27番地は確かにあった。そしてそこそ、ぼくが何度となく出入りした門であった。

自分が住んでいた屋根裏部屋まで上がるか、少なくとも入口の門のすぐ後ろにある郵便箱で、現在誰が住んでいるのか確認したかった。しかし、門の脇には暗証番号を押すボタンがついていて（そんなものかつてはなかった）、門の内部に入り込むことさえ叶わなかった。

そこから直ちに所在のわかる Montregueil 通りもすっかり様変わりした。いつもかよった肉屋は内装を改めてモダンになり、八百屋は向かって左から右に店を移した。それぞれ一人ずつ顔を覚えている若い男の店員の姿も見えなかった。この通りのカフェで昼食を取ろうと考えていたが、ちょうど昼前で満席に近く、どのテラスにも腰掛ける勇気がなかった。観光客など訪れることのないこの界限で、ぼくはもはや住人ではない。歩き慣れた St. Denis 街も、今のぼくには刺激が強すぎる。口ずさむのはシャンソンの La bohème。

その後の1週間の「パリ観光」についてはもう記すまい。ツーリストとして忙しく見所を回るパリは、ひたすら凝縮されて味が濃く疲れる。というよりパリはやはり人を緊張させ疲労させる街なのだ。人種のるつぼ、そして観光客の異常な多さ。北駅や東駅周辺の気取りのなさが心和ませるゆえんだ。これから

地方を回るにあたって楽しみなのは、観光客も日本人も激減するだろうということ。たぶん、静かな時が送れるだろう。

ようやくパリに慣れたと思ったら、今度は移動の緊張。今は正直言って30日も旅を重ねるのは気が重く、この年齢を抱え、慣れぬ異邦で移動を続けるのは無謀だという思いもある。やり遂げるとすれば、登山と同様、ぼくのプライドがかかっているということであって、楽しみの持続を求めているわけではないのだ。ともかく今は、放浪をこそ日常にせねばならない。

不思議なことに TGV の一等車両に乗るのははじめてだけれど、内装は想像以上にシックで揺れない。座席は横 2 + 1 のぜいたくさで、二人並びの分はすべて空席。スーツ姿のビジネスマンが多いようだ。やるべきことがたくさんある気もするが、眠りをむさぼりたい欲求も大きい。疲れと緊張の角逐。そう言えば、ヨーロッパの古き良きコンパートメントはどうなってしまったのだろう。隣人と何か話すだろうと思っていたのに、それもできない。あるいはしなくて済む。かくしてヨーロッパ人は、ますます個人主義の殻に閉じこもってしまうのだろうか。

同じ一等車から Dijon 駅に降り立ったのはわずかに 7 人。観光シーズンも終わりがとの期待を裏切って、二等車からは荷物を抱えた観光客が先に大量に吐き出されていた。目当ての安ホテルが奪われてしまうのではないかと、少々足を急がせる。12h35、予定していた駅前の Hôtel de Paris にチェックイン完了。フロントのよぼよぼのおばあさんに42ユーロの部屋でいいかと問われて OK したのに、どういうわけか55ユーロの部屋をあてがわれ、朝食込みで62,65ユーロの前払いとなる。その彼女、今度はカードが利かないなどと言い出してハラハラさせられたが、もう一人のてきぱきしたおばさまが現れて事なきを得る。すぐに入室できたのはありがたかった。

部屋はシンプルだが、居住性はパリのホテルよりはるかによい。ただしカードでドアを開けるのに苦労し、今度は出るとき閉めるのにまた一騒動。ホテル

慣れしていない...はずはないのに、一つのホテルのシステムに慣れるまでは時間がかかるものだ。部屋に目覚まし時計がなさそうなので、明朝8hのコールを頼んで街に出る。貴重品を部屋に残すか持ち歩くかは大いに迷うけれど、現金、パスポート類はすべて携行することにする。

大通りに出た途端に苛烈な異邦人感。見知らぬヨーロッパの町を歩くのは20年ぶりではあるのだが、それにしても予想もしなかったヒリヒリする不快な違和感に苛まれる。なにゆえこんなことをしているのか、なんの足しになるのか。歩く自分の足を見下ろしてみると、心と身体が分裂した感じがする。人が大勢張り付いた陽だまりのテラスに腰を下ろす気にもなれず、食べなければ生きられぬことがひどくわずらわしい。

こんなときはワインをあおってしまうに越したことはないので、Notre-Dame 裏にある『歩き方』（ガイドブック『地球の歩き方』をこう略す）推薦のレストランを探す。しかしごく狭い街なのに見つからず、ひょっとして、とガイドを見直すとやはり月曜休業。看板までしまいこんでしまっていたのか。今日は昼メシにしっかりブルゴーニュ料理を食し、夜はホテル近くで軽い夕食と考えていたが、作戦を変更せざるをえない。中心をやや離れたテラスで、やはりブルゴーニュ名物のエスカルゴを試すことにする。供されたそれは、こんなカフェといいながら、プリプリと歯応えがよくて空前のうまさだった。

今日は快晴で陽射しは強いが空気は爽快。今いる日陰のテラスでは肌寒いほどだ。まだなんの散策も始まってはいない。étrangeté（異邦人感）とは、自ら求めた一人旅ならではの孤独感ではないか。

Dijon の街見物は、思いがけず近くの美術館から始まってしまった。絵など見るモードに入っていなかったのが、当惑が先に立つ。イタリアルネッサンスから現代美術までけっこう大物を集めているのに、大作家の駄作が多いのと焦点が定まっていないのとで、まるで心に届かない。地方の国公立美術館とは、

しょせんこういうものなのだ。地元の中高生が、美術の流れがどういうものかを概略的に理解できればそれでよい。

次に見るべきスポットを探しているうちに、たまたま運よく Palais des Ducs (ブルゴーニュ大公宮殿) 付属の Tour Philippe le Bon (フィリップ善良公の塔) ツアー開始の時刻に落ち合う。切符売り場に駆け込んでチケットを購入しているあいだ、ちゃんと腸が収まっているのかと心配になるほど細い胴回りをした、美しい案内のお嬢さんが待っていてくれる。狭い螺旋階段をただひたすらに登り、誰もが疲れ果てた頃ようやく屋上へ。

ここからの風景は、エッフェル塔の第一展望台にも匹敵しうほど圧巻だった。正面には丘が拡がり、こうやって眺めると意外に大きい街が一望できる。パリと印象が異なるのは、落ち着いた茶色の屋根のせいもあるだろうが、そのことごとくが鋭い傾斜を見せていることにもある。雪深い地方の知恵だと思いが、冬に至ればここも雪が降るのだろうか。

午後6時。Cathédrale St. Bénigne (サン・ベニーニュ大聖堂) で荘厳なパイオルガンの調べを聞いている。これで本日の旅程は実質的に終わる。カテドラル内部に見るべきものはないが、先に訪れた crypte (地下礼拝堂、地下納骨堂) は、迫り来る重圧感をもっていた。振り仰ぐ voûte (丸天井) は天を彷彿とさせるが、湿った地下室は死に直結している。そこに祈りの場を設けることの不思議。

考古学博物館は、石の彫刻群だけが林立するシンプルな白の世界。足元は小気味よい音を鳴らす小石の集積。最奥の一番広く印象的な部屋で撮影の許可を求めると、ぼくを撮ってくれると言う。「いい思い出になるから」と。入り口で10分後に閉館と告げられていたので、たった一人の鑑賞は落ち着かなかった。早々に街に飛び出す。

街の一周が終了し、あとは夕食を残すのみだが、当初予定していた『歩き方』推薦のレストランは19hまで開かない。アルコールが入ると慣れぬ夜の街

では決まって迷うので、ひとまず駅前まで戻ったものの、どのブラスリーも閑散としていて足を踏み入れる気持ちを起こさせない。今宵はブルゴーニュ料理を堪能したいので、どこでもいいというわけにはいかないし、雰囲気の良い悪しも無視できない。

やっと腰をおろしたのは、昼間あまりにも人が多くて敬遠したテラスだ。Spécialités bourguignonnes (ブルゴーニュ料理) の大きな文字も躍っている。ところがウェイターが、月曜日は食べ物を出さないと言う。“Rien à manger?” 「なにもないの?」のぼくの問いに Non。やさしく腕を叩きながら隣に pizzeria があるからと教えられて、心が傷つきはしなかったが、さて困った。もちろんピザなど毛頭食べる気にならないからだ。おまけに道まで見失い、観光ルートを一周して再び St. Benigne 大聖堂に戻ってしまった。しかしここまで来れば予定していたレストランに近いし、ほどよく腹もすいてきた。

入り口で案内を待ちながら佇んでいて、真下の席から「教授!」と呼びかけられたときの驚き! かくして「とーだい君」(行きの飛行機で成田から隣り合わせた東大法学部2年生。彼は30日でフランス一周を目指していた)と、一週間ぶりの奇跡の再会。花の都ではユースに泊まり、パンと缶詰の貧乏生活を重ねてきたらしい。とーだい君、今宵は臍を決して、地元ユースと『歩き方』同時推薦のレストランで、初の豪華夕食を楽しんでいたのだそうだ。そんな彼に21ユーロの Côtes de Nuits (比較的高級な赤ワイン) と、食後酒 calvados をごちそうしてあげる。

彼はエスカルゴを感動して食べていたが、ぼくは jambon persillé (パセリのみじん切りを振りかけたハム) + コッコヴァン + ブルゴーニュ産フロマージュの盛り合わせ、あわせて20ユーロの menu (定食) を頼む。最初のハムから量はすばらしく多く、コッコヴァンをやや残し、フロマージュに至れば食傷状態。メインのコッコヴァンは美味だったけれど、感動するほどではなかった。

どうしようもない寂しさに包まれていたので、彼に巡り会えたのは心底僥倖。いまだパリの緊張を引きずったままのヤツに、「ここまで来たらリラックス！ リラックス！」と励ましてやったが、心にカツを入れられたのはお互い様だ。街中から離れたユースに帰る彼と、再度の握手をして別れる。ホテルまでの道はまったく問題なかった。

翌日は早く目覚め、8 hのコールまでぼんやりしていた。そしてカーテンを開け外を見て、“Il pleut sur Dijon!” 「ディジョンに雨が降っている！」と叫んでしまった。パリ以降いつまで続くかと思っていた奇跡の好天がついに崩れたのだ。しかしこの雨はぼくの心を落ち着かせてくれたようだ。ひたすら見て回らねばと焦るささくれた気持ちに、心地よく水を掛けてくれた。

シャワールームはパリのホテルの倍の広さがあり、清潔で快適だった。だがまずもってタオルが異様にぶ厚く、石鹸の歯が立たない。こういうときは肌に直接塗りこむのだ。さらにシャンプーが置かれていない。さっきドライヤーが目についたが、シャンプーのほうがいくら探してもない。汗でガチガチになった髪を石鹸で洗う。

駅に着いたのは発車の30分前。ホームを探して階段をのぼったりおりたりしたから、やはりこの程度の余裕は必要だろう。発車時間が迫ると人があふれ返ってきたが、一等車両はガラ空き。話し声がまったくないのもありがたい。Dijonは落ち着いた美しい古都だったけれど、半日観光で充分。また、大学がある分若者が多く、もはや若くない私としてはどこか油断がなかった。日本での若者不信が尾を引いた悲劇。

車中では次の訪問地 Lyon の計画を練ったが、街が広いだけに少々やっかいだった。二つの停車駅を経て、一等車両もかなり満席となる。おばあさんが連れ合いに“Je n'aime pas voyager reculant”と話していたのは笑えた。フランスの列車は進行方向に応じて座席の背もたれを逆転させたりしないで固定されて

いるため、真ん中から半分が逆向きでの進行を強いられる。「わたしゃ、いやだよ、逆向きは」と嘆いていたわけである。窓外の景色は美しいと言えなくはないが、単調で眠くなって困る。

Lyon Pardieu 駅から Lyon Perrache 駅まではメトロ、バスなどで連絡と『歩き方』には書かれてあった（リヨンには二つの駅があり、列車によって到着駅が異なる。中心地は後者）。しかしさほど待たずに乗れる列車がある。ところがホームに上がってわかったが、来るのは予約の必要な TGV だ。一駅だけ乗車してもかまわないのか、そのへんのシステムがよくわからないままに乗ってしまった。そういえば先の TGV は、ここまで一度も検札がなかった。

Lyon Perrache 駅着、12h 過ぎ。雨雲を逃げて来たか、曇ってはいるが降ってはいない。駅から真下に見えている目当てのホテルを探すのに駅裏の界限で往生し（確かにとんでもない道を通らなければならなかったのである）、12h 45 ようやく Hôtel Normandie に落ち着く。最初は COMPLET（満室）の掲示がフロントにあって肝を冷やしたが、「あ、もう最後の一室しかないんで、これ置いといたんだ」と受付のおじいさん（なんでまた）。最後にまた触れるが、最高にうれしい人だった。しかも部屋は十二分に広く、エキストラベッドまで備わっている。シャワー付きでトイレのみ外という条件で、えらく安い部屋をゲットすることができた。洗濯は明日に回して街に出ることにする。

14h 40. ようやくにしてレストランでの注文を終える。ここに到るまでの格闘は、やはり慣れぬ街なればこそその宿命だった。簡単に列挙する。1) 駅に戻るまでの道。2) Chamonix までの列車の予約（ひどく時間を掛けさせられた挙句に、不要だと判明）。3) メトロ・バス一日券の購入。4) 中心地 Place Bellecour（ベルクール広場）についてからの観光案内所探し。

3) については一言。博物館、美術館は無視して街を見て回るべく、一日券を買えばちょうどいいと自動販売機の前に立ったばかりに、こいつがひどく抵抗した。札は受け入れず、かといって硬貨も入らない。見ていればリヨン市民は

みな現金ではなく特別のカードを使用していて、となりのマダムに尋ねても「ぜんぜん知らない」と答えるのみ。一度そういう言い方をされると、二度とほかの人に尋ねにくくなるものだ。必要な選択をしたあと、最後にもう一度確認の valider（有効）ボタンを押せば硬貨の挿入口が開くと自分でわかるまで、どれだけ時間がかかったかことか。その国の言語を解さなければ、自販機はまるでお手上げだ。

さて昼食である。時間がひどく遅いのでエスカルゴ（カキと同様、腹に溜らないのがいい）で済まそうかと考えていた。だが Dijon とは異なって名産地ではないのか、置いている店を見つけることはできなかった。店を物色しながら歩いていると、さすが美食の街、St. Jean 教会を北に進めば、レストラン一色に染められた通りに一変する。結局 L 'Amphitryon（以下に記す理由により店名を明示しておく）なる、けっこう高めの店で、Lyon 名産とは知らなかった andouillette（豚の内臓の腸詰）を食すことにする。かなり待たされはしたが、運ばれて来た腸詰はもののみごとな太々しさ。そして一切れナイフを入れて口に運ぶやいなや——うーむ、思わず目をつぶり頭を振ってしまった。ちょうど通りかかったウェイトレスが “Qu'est-ce qu'il y a?” 「どうしたんですか？」と心配顔なので、TRES BON!

付け合せのポテトグラタンも、この値段では信じられぬ美味。ジャガイモも牛乳もバターも、なにもかもうまいのだろう。このレストラン、人の入りから見ても地元の人気店なのではないか。ロクな観光もせぬままに満腹となってしまうけれど、まあこんなものかと観念する。さっきまで強かった風も止んで、長袖シャツを下ろしてちょうどいい。

スズメたちが最前より手から直接パンをついばんでくれるのがほんとうに愛らしく、そんなぼくを撮影している通りがかりの観光客がいたので、パンを少々分けてあげた。15h40 によりやく腰を上げる。晩飯はいったいどうなるんだろう。余談ではあるが、VISA カードが機械を通してパスしなかった。その

後の長い旅行を通して最初で最後のアクシデントだったが、このときばかりは行く末が案じられたものである。

17h. この街を代表するモニュメントである、Fourvière の丘のローマ劇場に立つ。下でケーブルカーの駅を探しながら、めんどうなので坂道を登り切って息を切らしたが、さすがにここからは絶景が一望できる。一部に青空も覗き、天気はなんとか持ってくれた。午後5時とは信じられぬ明るみ。緩やかな坂をさらに登って、一瞬視界が開けた途端に目を見張った。白亜の Notre-Dame が織り成す、なんと清楚なたたずまい。観光案内所でもらった資料で確認すると、1872 - 96年に建立とのことで、なんと印象派のまっさかりの建造物ではないか。石の白さは時代を経ていないゆえと了解できたが、パリの Sacré-Coeur のような浅薄さがなく好感が持てる。

この寺院の傍らからは、眼下に再びパノラミックな光景を遠望することができる。ローマ劇場から見下ろしたのは、屋根の色彩を欠いた近代的な建物が目立つ新興地で、今度は一面オレンジ色の屋根を戴く落ち着いたたたずまい。古都 Lyon に触れて、なにやら安心する（そういえばこの街はわが横浜の姉妹都市なのであった）。まもなくどこの美術館も閉まってしまうが、先にも書いたとおりこれでよい。おじょうさん二人に写真を頼まれ、「ぼくはプロフェッショナルだからね。当てにしていよいよ」と冗談を返す。

街角に掲示された地図を見ながら行き先を確認していると、若い学生が “You are lost? Can I help you?” と近づいてくる。こちらはもちろんフランス語で尋ねて相手も “Oh, pardon” と応じつつ道を教えてくれたのだが、この手の親切は、パリでは昔も今回も経験したことがない。

Gare St. Paul (サンポール駅) まで降ると、湧いて出たような大量の学生たちに出会う。これまでに何回となく確認したことだが、20年前はこんなガキどもと机を並べていたのか。Pont de la Feuillée (フーイエ橋) を抜けて中の島へ。広大な Terreaux 広場のテラスで、真正面に美術館、左手に市庁舎を見つ

つ、昼食のせいでもあるまいが、やたら渴いた喉に orangina（愛好するオレンジ炭酸飲料）を流し込む。天気は悪くなったり回復したりだったが、17h30の今はかなり空が青さを取り戻している。Lyon 半日滞在の前半部はトラブル続きだったが、後半部はすべて順調に推移した。ようやく旅人が常態となってきたか。

『歩き方』に「レストランが多い」と記された Grenette 通りを目指してまっすぐ南下し、なるほど魅力的な店で溢れた一帯を、食欲のなさのために横目でにらんで通過する。以下、Emile Zola 通り、出発点だった Bellecour 広場、Auguste Comte 通り（二つの通りは名称の好みで選んだ）とひたすら南下して、駅まで歩き通すことになった。一日乗車券を購入しながら、使ったのは行きの Bellecour 広場まで一回にすぎず、今後はミラノやパリでも二度とその種の切符に食指をそそられることはなかった。自分の足に絶対の自信を得たのである。

最初に記したように、宿泊ホテルは駅横のうら寂れた一角に位置しているが、それでも5、6軒のカフェ、レストランは軒を並べている。食欲はまるでなく、唯一カキを置いているレストランをガラス越しに覗けば、まさに難には稀、ウェイターが全員蝶ネクタイを召していらっしゃる。そしてテーブルはもちろんりっぱなクロス掛け。ロクなものを食する気のない身としては躊躇せざるをえないが、隣のもロッコレストラン（量が多いこと請け合い）よりはましと、観念して歩み入る。すると——どでかい、だだっ広い、天井が異様に高い。ローマ人になった気分が味わえるほど想像を絶して広大なのである。内装は華麗ではないものの、歴史をしっかりと刻みつけた名店の趣は味わうことができる。

運ばれて来たカキは Isigny No.6 の半ダースで、身の太り具合といい味といい、パリのそれを凌駕している（かかる内陸でカキを——という批判はわかるが、新鮮なものを取り寄せようとするれば、北洋からの時間差はほんの数時間で

あろう。その意味ではフランスは狭いのである)。これを食しているうちに尻上がりに食欲が湧いてきた。しかしもう一皿追加する余裕はないので、めずらしくデザートで締めるべくアイスクリームを注文する。二つの味のチョイス (deux boules と言い、これがフランスの標準) として、チョコレートとミント。

最初にビールを、さらに白ワインに petit Chablit のハーフボトルを注文したので、合計30,95ユーロと、まずまずパリ並みの値段の快適な夕食。いにしえのライフルマンを彷彿とさせる厳しい表情をした老年の係が、たいへん丁寧なもてなしをしてくれたので、2ユーロのチップを置く。先走って言えばその後の長旅においても、レストランでまず例外なく丁寧な扱いを受けることになるが、ここがその先駆けだったのである。

チップについて一言。これに頭を悩ませるのはまったくもってばかげている。若き日のパリ時代にはまずもってチップなど置かなかったし、向こうも若造から期待などしていない。では中年を迎えた今では？ まず、日本旅館で仲居さんに渡す「心付け」とはまるで性格が異なることを認識しておいたほうがいい。これはサービスを受ける以前に、よりよいサービスを期待して渡すものであり、チップはサービスを受けたあとで、それに対する満足度に応じて支払われる謝礼にほかならない。だから不満があれば絶対に支払ってはならないし、「さよなら」も言わずに立ち去るのが一番。『歩き方』には料金の10%から15%が普通などと書かれているが、これも悪しき形式主義。満足度をどうして普遍化することができよう。

ぼくはカフェでは釣り銭のうち、数十円に満たない小銭は残しておくことが少なくなかったが、それでも相手は申し訳ないほどに Merci, Grazie と礼を言ってくれた。料金の高いレストランではチップの額もおのずから多くなるが、30ユーロの食事で4,5ユーロのチップなんて、とんでもない。サービス料徴収が慣習化してから(ずいぶん昔からのことだが。ちなみにイタリアの

ちゃんとした店では coperto と称したテーブルチャージを取られる), チップは形骸化したのであり, 払わないからバカにされるなどとは夢思わないことである。

さてホテルに帰還したのが21 h 30。バスに湯を張ろうとして, なぜ浴槽がありながら avec bain (風呂付き) ではなく avec douche (シャワー付き) と言われたのが了解できた。蛇口はいくら捻っても音沙汰なく, シャワーの穴から量の豊かでない湯が出るだけなのだ。フランス人ならシャワーを浴びるだけで甘んじましょうけれど, ゆっくり湯が溜まるのを待ちさえすればいい。湯船でのんびり手足を伸ばして, さて明日の Chamonix の天気はいかに? あまりひどければ, 二泊の予定を一泊に削減することを考えないではない。

昨夜は就寝直前, 隣室に二人連れが入って来たようだが, そんな声が気にならぬほどに熟睡した。7 h 30のコールとともに窓の外を覗いてみれば青空で, 期待多き Chamonix を控えほっと一息つく。そのついでに眼前にある廃墟に, つくづくと見入る。ひびが入り変色し, 不朽を誇るかに感じられる石もまた死ぬのだと, その建物は教えてくれている。

バスタブはあってもシャンプーはなく, また石鹸で頭を洗う。ホテルのお定まりの朝食にはうんざりして, 早々に部屋に上がりチェックアウト。つるつる頭で, こよなくいい笑顔をしたフロントのおじいちゃん, チェックインのときからひたすら愛想がよく, ときおりカタコトの日本語を交えたりするのもかわいらしい。その街の印象を絶対的に左右するのがホテルのフロントの対応であることは, 海外旅行に関してはことさら疑う余地がない。“Bonne journée et BONNE VIE” 「よい一日を, そしてよい人生を」。ぼくは“Au revoir” 「さようなら」に代えて, これをおじいちゃんへの別れの言葉としたのである。おじいちゃんの, ことさらしい笑顔が返ってくる。

ホームに着いて8 h 45。まだ列車は入線もしておらず寒風が吹き抜け, とて

も留まってはおられず待合所に戻る。イスに隣り合わせた二人のフランス人女性が話をしており、金髪美人のほうが Chamonix に行くらしい。ところが他方の女性、アメリカ人だと言うのだから、ぼくもぶっとんだがフランス女性も目を丸くして “Sorry!”。完璧なフランス語だったのである。乗換駅の St. Gervais までは相当の長駆なので、イタリア語の復習でもしよう。昨夜 *potere*（英語の *can*）の活用がはっきり頭に蘇って来ず、これはこれはとあわてていたのである。

このローカル列車 TER は、先頭 2 両が Genève 行き、次の 2 両が Evian 行き、最後の 2 両が St. Gervais 行きと、複雑な構成になっている。ぼくはターミナルから乗ったからいいようなものの、わずか数分で到着する Lyon Part Dieu では、4 個もの大トランクを運び込んできた黒人青年が、ようやく網棚に寄せ切った段階で上記の車内放送。哀れにも再びすべてを下ろしてホームを走り去ってゆく。後ろの席の老夫婦も、検票の車掌に英語で説明を受け、次の駅で乗り換えねばならない。

かくいう私も車掌の最後の一言が聞き取れず、何かお世辞かとうなずいておいたが、あとで反芻してみれば St. Gervais に行くのかと、ぼくの行き先を確認したにすぎなかったのだ。一等車両というのに、イス、じゅうたんはぼろで、窓は外の景色が見えにくいほどひどく汚れており、背もたれは動かない。TER とはこんなものなのか。

山に入ってゆくのを楽しみにしていたら、10時を過ぎたあたりから急に傾斜が増してきた。日本でいえば小海線のレベルをすでに超えていて、次から次へと垂直の岩山が連なり、ごくたまに通過する駅周辺のみ、くすんだ小さな家々が寄り添っている。あそこにどんな人生が繰り広げられているのか。あれだけ歩いてまだ壊れぬかと感心するほど足は絶好調で、メンタルな余裕も十二分。後者については、半月ほどかけて完全に組み立てた旅程表のおかげがきわめて大きい。列車の時刻、乗り換えまでしっかりメモしてあるので、駅で立ちんば

して時刻表を見る徒労がない。まるで添乗員 + 客 = 1 人のツアーに乗り込んでいるかのようだ。11h40, Annemasse 発。ここから進行方向が逆転する。

吹き込んでくる冷たい風にくしゃみを連発していた。それが空調のせいではなく、じゅうたんの長い割れ目から吹き上げているのだとわかり、舌打ちして席を移動する。一等客とはとても思えぬ、あやしげな服装と顔つきをした若い男が、ガラ空きにもかかわらずわざわざ隣のボックスに座り、とたんに胸がどきどきしてくる。この男、10分ほどいて次の駅で降り、出口に行くでもなくホームにたたずんでいる。駅から駅へと一等車両を乗り継ぎ、乗客が眠り込んででもいれば悪事!? これだからトイレに立つことにさえ気を使う。真夏のような雲の湧く申し分ない天候が、いったいいつまで持続してくれるのだろうか。

12h45, St. Gervais 乗り換え。短く汚い Chamonix 行き電車で、前のシートに座った若い日本人女性から声を掛けられ、終点まで話す。会社を辞め、10月から決まっている次の就職までスペイン、フランスを旅しているとのこと。電車は厳しい岩場の目立つ山間を登り、Chamonix 着。

2 シャモニからニースへ

ヒマラヤと違い、ヨーロッパアルプスはぼくの憧れの対象であったわけではない。そのせいもあり、街に降り立った途端から観光地気分むきだしの雰囲気はどうも心にそぐわない。来るときの電車の空きようからは想像できなかったくらい、とにかく人が多すぎるのだ。時とともに実感してゆくことになるが、山男のぼくにとってこの街はアルプスの前哨基地にほかならないが、大多数の観光客にとってはたんなる高級リゾート地にすぎないのだ。

Lyon で予約しておいたので、まずは安心して駅前通りのホテル Pointe Isabelle にチェックイン。通された部屋はまず爽やかなレモンの香りが立ち込め、室内は黄色で統一されていて、広い上に快適そのものである。写真に撮っ

ておきたい最初の（そして最後の!？）部屋。軽く洗濯をして、14h40によやく昼食を食べられる段取りとなった。こうやってテラスに腰掛けていると、老人観光客（そのほとんどが夫婦）の多さに驚かされる。純粋な若者の比率は一刻を切るかもしれない。でっかいザックを背負った山男たちは、8月いっぱい去ってしまったのだろうか。

メニューを一目見て、注文はオニオン・グラティネとただちに決めた。昼間は極楽、夜は満腹地獄の食生活が続いたので、スープなら量的にもちょうどいいだろう。そして運ばれてきたそれは、チーズのうまさ、焦がし方の絶妙さのおかげで、こんなにうまいのはかつて食べたことがない。このオニオン・グラティネが6,5ユーロで、ピッチャー入りワインが4ユーロ。物価は安いようだ。

街の光景を数枚撮影したあと、St. Michel 教会、アルプスの情報基地である Maison de la Montagne（山の家）と回る。ガイドを雇う相談していたグループもいたが、山のシーズンは明らかに終わったようだ。

17h20。名峰 Aiguille du Midi を真上に見晴るかすカフェのテラスに座り、ビールを飲む。ついさっきはじめて目にしたときは、登る山でもないのに涙がにじんだ。まさに針（aiguille）としか形容のつかない、悪意を持った峰々。山全体の高さの3/5以上は緑に覆われ、そこから切り立った岩峰に突如一変するので、いっそう鋭さが際立つのだ。

そのあとはさして目的もなくぶらぶら見て回った。おそろしく狭い街だから、一周に数時間もかからない。どの街角も撮影したくなるから、逆に枚数が少なくなる。Aiguille du Midi までのロープウェイのことで聞こうかと、再び観光案内所を訪れると、にこやかなおば（あ）さまが話の途中で日本語を交える。ああ、これが『歩き方』に記載されていた日本語のわかる係員なのか。

Aiguille du Midi までの中間駅（2317m）へのロープウェイはまだ運行中かと尋ねると、それならなぜ頂上（3842m）まで行かないのかと彼女。富士山よ

りちょっと高いくらいでしょ。“Mais l'important, c'est la température qu'il fait là-haut.”「でも一番の問題は、その高さでの気温なんだけど」と言っても、Moins trios.「零下3度」と平然たるお答え。目を丸くするばかりに、持っている衣服全部着ていけば？ と、こともなげにそそのかす。気が大きくなってきたのは確かだ。

明日昼に行く予定のレストランの資料をホテルに忘れてしまって、彼女に尋ねようにも名前が思い出せない。しかし彼女、すぐに察して Chalet la Floria でしょうと指摘してくれる。やはり当地では有名なレストランなのか。山道を歩いて行くのだが、片道一時間とのこと。Aiguille du Midi, Chalet la Floria に次ぐ三つ目の見所は、登山電車で行く Montenvers と氷河 Mer de Glace。丸一日かければ、これらすべてを回れるかもしれない。

腹ごなしに街外れまで赴き、たまたま見かけた Maison des Fondues なる店で夕食と決める。だっ広い店内に一組しか客が入っていないのが気にはなったが、目的はもちろんだ一つ、名物フォンデュ。客かと思ったのは女性店主で、愛想はよくなく、しかもフォンデュは二人前からだと言。確かに外のメニューにそう記されていたのに、一瞬そう気づいて忘れていたのだ。22ユーロの menu には一人前で含まれていると言われても、それでは食べきれないことは試す前から目に見えている。まこと今回の旅行では、毎回のように食事との涙ぐましい死闘が演じられたのである。

結局 spécialité régionale (地方料理) の一品として、berthoud なるものを頼んでみる。「白ワインにチーズをたっぷり流し込んで」、といった謳い文句が気に入ったからである。テーブルはスイス風にむき出しの木製で、窓から覗けば Aiguille du Midi の尖峰が間近に迫っている。運ばれてきたのは、木の樽入りのゆでたジャガイモが五つと、特大のグラタン皿に注ぎ入れられた溶けたチーズ。前者を後者にまぶして食べるのであり、要するにパンの代わりにジャガイモというわけ。一口含むと濃厚な白ワインの香りが口のなかに広がり、小気味

よく伸びるチーズは、ざくざくと歯切れがよい。

この料理を食するポイントはスピードであり、いつもの調子で記録をつけながらのんびり味わっているうちに、チーズがどんどん冷めて硬くなってまずくなる。相も変わらず想像以上の量で、ジャガイモの半分を残したとはいえ、大皿のサラダと生ハムもついて13,8ユーロ。いい夕食だった。地方料理は洗練されていないなあ、と思ったことも事実であるけれど。イタリア国境まで来たら飲もうと楽しみにしていた食後酒の grappa は、夕刻ビールを飲みすぎたために白ワインが余って手が出ず、コーヒーに甘んじる。

あとで入店してきたのは常連風の三人組のみで、こんなにおいしくてなぜ客が少ないかと不審に思ってしまうが、帰りがけに見れば夕食時の Chamonix はどの店も閑古鳥が鳴いている状況だった。あの大量の観光客たちは、いったいどこへ消えてしまったのか。観光案内所の情報では天気はあさってのほうがいいらしい。天候次第では Aiguille du Midi へのロープウェイの断念を考えぬでもないが、最重要案件のそれをまずトライせねばなるまい。8時を過ぎているというのに、まだ鋭い山容が空に黒く消え残っている。

朝食のため広く快適な食堂に入ると、朝食をとっているのはいかにもリッチそうなヨーロッパ人だらけで日本人の姿はない。このホテルは日本人の李さんの経営なので、山の話を知りたいと期待して選んだ経緯もあり、客も山関係の日本人だらけかと勝手に想像していたのだ。フロントにも常時、日本語を解さぬフランス人青年が座っていたし、李さんも奥さんの Isabelle さんも姿を見かけなかった。

朝食はパン、ジュース、カフェオレだけのフランス式ではなく、貧乏な目には豪華極まりないアメリカ式である（食事を並べた棚の広いこと！）。これが苦手なのは、文字通りヘドを吐くほど腹に詰め込んでしまうからだ。宿泊代が予算を超過したので、明日はここでの朝食は抜きにしておこう（フランス・

イタリアでは知る限りすべてのホテルで朝食は別料金で、取る取らぬはまったく自由である)。ついでに、明日は早出だから支払いも済ませておこうとフロントに赴く。初対面の女性係員から渡された請求書には、一泊目56,7ユーロ、二泊目48,9ユーロ、朝食代1,1ユーロとある。こんな安い朝食代はありえない。これ以後、フロントの前は忍び足で通るようになったのである。

Aiguille du Midi ヘロープウェイで登るに迷いはあったものの、天候は曇天ながら一部に青空も覗いている。途中駅の Plan de l'Aiguille で甘んじることにして、その方向を見上げるとガスに包まれており、あの程度だと眺望が利かないことは山の経験から知っている。しかも往復14,4ユーロと料金も安くないが、ヨーロッパアルプスの一端なればこそ撤退するわけにはいかない。

出発間際に日本人団体が乗り込んできて、車内はあっというまに谷川岳ロープウェイ状態になる。途中で一度晴れたガスが終点駅 Plan de l'Aiguille を覆い、再び白の世界に。見下ろすどころか周囲を見回すこともかなわず、記録だけつけて10分でロープウェイ駅に舞い戻る。麓の駅の温度表示で頂上は - 5 と記録されていたが、ここはウィンドブレーカーを重ね着すれば充分だ。下界にくだると上方は次第に晴れ上がっており、地団駄を踏みたい気分。一番悪いときに登ってしまったかもしれないけれど、山の天気はまた崩れる。

次に控えしは本日のメインイベント、Chalet la Floria へのトレッキングである。最初こそ平坦と思わせたルートには次第に岩と木の根が張り出し、丹沢の低山並みの山道となる。眺望はときおり右手に開けるのみ。ウィンドブレーカーを脱いでも汗が頬を濡らし続け、もうカンベンしてよと祈っても着いてくれない。さらにもう一汗かき、もう一度祈った辺りで、ようやく色とりどりの花が前方で迎えてくれた。そう、この山小屋風レストランの特徴は、なにより周囲を飾る花々なのだ。

花に囲まれた建物の外観の美しさは、一年半前に日本で写真を見て以来「覚悟」してきた。その上、テラスから見晴るかす氷河と峰々もまた想像を絶した

圧巻。また、写真で見ていたとおり、ポタージュと大量のトマトサラダは味もごく素朴で、山のレストランにこれ以上ふさわしいものはない。先着していたドイツ人二人組と、山道の途中で追い抜いた若いカップルを加え、総勢5人で広大な屋外テラスを占領してのぜいたく極まりない昼食が始まる。

やはり山の天気は変わりやすく、向かいの山肌を雲が這い降り、やがてここも強烈な陽の陰から小雨が降ってきた。コーヒーは山小屋ムードそのものの室内に避難して飲んだが、すぐにまた陽射しが降り注いでくる。ウェイトレスは、黒い肌とアラブ系の顔をした、かなりなまりの強いお嬢さん。愛想がいいので、こちらもここに足を運んだ経緯を説明した。日本で Chamonix の写真集を見て以来、ここでの食事を楽しみにしてきたこと（写真集の著者名を覚えていたのは彼女のほうである）、ようやく夢が叶ったことなど。フランス語がとてもじょうずですねと言われたが、こうしたほめ言葉はパリでは想像もできない。

苦労した往路も帰路はあっけなく駆けくんだり、ふと思い出して山岳博物館に足を運んでみる。アルプス登山の歴史資料を展示しているので、興味深いといえはすべてが興味深いが、残念なことに撮影は禁止だし、まあ雰囲気を楽しむという程度であった。あとは氷河 Mer de Glace（氷の海）に足を運べば Chamonix 探訪は完了する。

足を急がせて登山鉄道駅へ。電車は1時間に1本の運行しかないと知り、15h 発まで2分を残すのみで冷や汗をかかされる。しかし結局15分遅れで出発したのは「アルプス時間」なのか。ホームには待ち客が溢れんばかりで、全員が座れたのがウソのようだった。相変わらず老人の目立つ車内は、終点の Montenvers 駅から氷河を眺めに行くためだけの電車だから、ひたすら観光ムードが満ち溢れている。往復13,4ユーロ。カネのかかる街だ。

電車はけっこうな傾斜で登りに登る（なるほど、「登山電車」は名ばかりではなかったのだ）。30分で到着する終点 Montenvers では、展望台から一望す

る圧倒的大迫力の風景に言葉が追いついてくれない。誰もがまずはカメラに任せて撮影に耽っている。写真で風景の部分々々を切り取って寄せ集めたところで、この総体には決して追いつくこともできないのだけれど。巨大な岩場と微妙な緑のグラデーションが果てしなく拡がり、右手奥のかなたには雲をまとった神々しい Grandes Jorasses。こういう風景ばかりは日本には存在しないし、想像したことすらない。

ここが地球温暖化の実例としてこの夏にテレビで何度も見た、あの有名な氷河なのだろうか。真下には拡がっているのは、瓦礫の河原ばかりである。あまりに荒々しく、ヨーロッパ的というよりアメリカ的と表現したほうがふさわしいような気さえする。氷河が間近に迫っている割に寒くはなく、気温15 くらいだろうか。近くの洞窟にしつらえられたクリスタル・ギャラリーでは、しずくの垂れ落ちる通路を巡りながら、ガラス窓越しに、大きな大理石とそれらを掘り当ててニカッと笑う男たちの写真を見て回る。Gold Rush の大理石版というわけか。

それだけ楽しんで終わりではなく、駅から続く遊歩道が意外に奥深くまで通じており、岩場をどんどん降って行くと La Grotte (洞窟) と Les Refuges (避難小屋) の分かれ道に達する。氷河の先端方面まで近寄れる後者のルートには人影もなく、封鎖された行き止まり地点までの単独行。何度遠望しても見飽きない Grandes Jorasses の頂きは、あまりに攻撃的で絶望感だけを覚えさせる。アルピニストの端くれとして、まず「登る」意識が先立つからいっそう思いが屈折するのだ。

帰りもまた長蛇の列で、どうせ座れるのだからと5分前に最後列に着くと、目の前で通せんぼの鎖を下ろされてしまった。隣のおばさまが機械にデジタル表示された81の数字を指差し、これが定員なんだと夫に話している。30分も待たされて麓からの電車がやってくる。さっきは二両編成が一台だけで出て行ったが、今度はもう一台後からやって来る。これがアルプス式臨時列車というわ

けか。また置き去りにされてはと、みな殺気立って乗り込む。17h30、麓駅に帰着。

昼飯が軽かったので、時間は早いがレストランを探すにはちょうどいい腹具合だ。Avré川沿いにアルザス風の室内テラスを張り出した店では、残念ながら7時開店と断られ、もう一軒の高級そうな店を選ぶ。ほんとうのことを言えば、もうチーズ主体の地元料理なんぞではなく、ムールか肉料理のほうが好ましかったのだ。しかしここはひとつ意地を張っておこう。menuの第一品 Feuilleté au Beaufort はチーズの揚巻といった風情で、美味とほめるほどではない。そして、ああ、第二品のフォンデュもチーズ料理か（自分で選んでおきながら）。下からアルコールランプで熱するのでただちに坊主地獄状態となり、焦げつかぬよう召使いのごとくヘラで掻き回し続けなければならない。時間が経てば経つだけ白ワインとチーズが分離してゆき、ランプを吹き消そうとしても燃え盛るばかり。

火口^{ほくち}にある取っ手をずらすと、神の加護か、一瞬のうちに、憎き炎は鎮火してくれた。ところでこのフォンデュであるが、こうやって小さい鍋で食べれば一人分で問題ないのに、なぜほとんどの店で「二名以上」の制限を設けているのか理解できない。ともかくチーズ地獄の夕食は終了した。肉を食べていないので腹が落ち着かず、デザートにミントアイスを注文すると、なにを心配したのか少量味見をさせてくれる。ぼくはもちろん「知ってるさ。好物なんだから」と言ってやったが、ウェイターも、「チョコレートが入っているだろ。これがフランス風さ」とわざわざ能書きを垂れる。ここでもぼくに対する愛想はひどくよかった。

とどめの digestif としてはじめて試した grappa は、頭がくらくらするほど強い上に、味も香りも好物の calvados にずっと引けを取る。（grappa はぶどうの絞りかすから作るイタリアの蒸留酒で、一方の calvados は、ノルマンディー産のりんごから作るフランスの蒸留酒）。日本の焼酎のなかにもきわめ

て近いものがあり、要するにこれはぶどうの安焼酎だと心得るべし。もちろん高級品もあるのだろう。

ホテルに戻って、発つ前の荷物の整理にけっこう時間がかかった。歯を磨きながらテレビのチャンネルを回してみると、映画あり、ルポあり、まあ日本と同じことなのだが、そのうちの一つがアラファトのライブを映し、最後から二つ目のチャンネルでは日本の番組を流している。そういえば、テレビの上のチャンネル表に 8ch. JSTV (Jap. TV) の表示があった。おぞましき「北の国から」の放送だったので、すぐに消して就寝。

午後12h ジャストに Nice 駅に到着し、観光案内所で駅から遠からず、高からずのホテルを紹介してもらう。45ユーロの部屋ながら、シャワー付きではじめての3階。名前も魅力的な Hotel Azur Riviera。

エレベーターのなかに最高にケッサクな張り紙があったので、そのまま採録しよう。

“ Il fait très chaud.

Ouf... Location de ventilateur à la réception pour seulement 4 euros par jour.”

「とても暑いですね

やれやれ... フロントで扇風機の貸し出し、一日たったの4ユーロ」

上にはぎらつく太陽のイラストと、真ん中に旧式な扇風機の写真。記録的酷暑に見舞われたこの夏を象徴する痕跡である。

駅に戻って翌朝の TGV の予約。ここではなにか情報を得るためにも切符を予約するためにも、まず最初の窓口で行列のあとに着かなければならない。なぜ整理券ぐらい機械で受け取るようにできていないのか。誰もが口々に文句を言い、若い男などは “C'est la folie!” 「狂ってるよ！」。じりじりと過ぎるムダな時間。駅舎を去って14h 30である。

街なかで絵葉書と切手を買ひ、煙草屋のおやじとちょっと話す。日本に送る

には切手が2枚必要だと言われたからだ。2枚？ と不審がるべくに，“Le Japon, c'est loin.”「日本は遠いからねえ」。「知ってるさ」と微笑むと、フランス語が上手だねえと、妙な褒め方をされる。

少なくとも一つの目的地に着くまで食事を取る気になれない性格は、しばしば損になる。せっかく Nice に来たのだから海辺まで出て魚介類、できればカキを——との期待は裏切られて、海辺を埋め尽くしているのは高級ホテルばかり。やむなくさっき見つけておいたレストランに戻ると、時すでに遅く夕方まで閉店とのこと。新たな店を求めてさらなる彷徨を余儀なくされる。ようやく見出したテラスに座って、早くも15h20。カキは置いていないかといちおうは尋ねてみたものの当てが外れ（結局パリに帰着するまで好物の生ガキは口にできなかったのである）、エスカルゴとムールの menu（19,5ユーロ）を食す。どこで食べても当たり外れのないありがたい一品である。

食事を終えて「デザートは？」と問われ、エスプレッソだけでいいと答えたあとで menu にコーヒーが含まれていたことを思い出した。“Je me suis trompé. Le dessert est compris!”「間違えた。デザート込みだったんだ！」と訂正すると，“C'est pourquoi j'ai insisté”「だから言ったじゃないの」とかわいくにらむ。この女性、スタイルは抜群で遠目にはえらく美人に見えるながら、近くからよく見れば40才は越えていた。それでも支払いを終えて “Vous êtes sexy. Au revoir!”「セクシーだねえ。さよなら！」と軽口をたたくと、なよなよと崩れる色っぽいしぐさをして見せる。この手の冗談は言葉の達者なフランスでしか言うことはできない。

海辺の交通量の激しい大通りを越えて浜辺に足を踏み入れ、何度も地団太を踏むことになった。波打ち際にいくつもすてきなブラッスリー（日本式に言えば海の家?!）が並んでいるではないか！ でも地中海の、なんと絶望的なまでに美しいこと。死に誘われるような——とぼくには感じられる——海の黒、深緑、エメラルド、そして波打ち際の白が織り成す諸調。快晴の空から降り注ぐ

陽は厳しかったが、風が心地よく一日中汗をかくことはなかった。水辺は裸体の群れで、一人黒ずくめの旅衣装に身を固めた自分がひたすらみじめったらしい。

Nice の象徴 Hôtel Negresco の近くまで歩いて波打ち際のテラスに座り、pastis を飲む。色彩の諧調に食前酒のほのかな黄色が加わる。こうしたひと時は Venezia 以来で、ただ波の崩れる様を見、耳を傾けていることが奇跡のようなぜいたくと感じられる。いつしか時は流れ、浜辺に降り立ち、落日を浴びて金色に輝く小石の群れに見とれる。

と——そいつが前触れもなく来襲してきたのだ。冷たい水感覚に飛びすすると、夕刻で高くなった波頭が左足を直撃したのだ。さしもの丈高い山靴でも防ぎきれず、中は水浸し。石段で応急処置を施していると、今度は頭上で大笑い。見ればぼくと同様におじいさんが波の襲撃を受けて、こちらは気の毒にズボンが腰までずぶ濡れである。お互い顔を見合わせて苦笑い。笑い声の主はもっぱら被害者の知人友人かと思えば、そのまま姿を消したところを見るとただの他人だったらしい。これが南仏人のおおらかさというやつか。

駅へとまっすぐに延びる Macearani 通りはレストランが目白押しで、それと直角に交わる通りもとても楽しそうな雰囲気醸している。お目当てのカキを置いている店もあって気を惹かれはしたが、腹具合からしても距離からしても駅前まで戻っておくほうが無難だ。Nice は規則的に広がった長方形の街なので迷う心配はないと踏んでいたのに、住居標示の悪さはパリと比較にもならない。ようやく現在地が確認できたときには、ホテルのある Assalit 通りまで舞い戻っていた（Assalit の発音がアサリなので親近感が持てた。そのことをフロントに伝えたかったが、アサリなんて単語は知る由もなし）。

海辺の街でありながら fruit de mer（海の幸の盛り合わせ）を置いている店がないのを嘆きつつ、やむなく途中で通ったレストランまで戻る。北の海であれほどなじみの深かったその一品は、南の海では定番でないらしい。前菜の魚

のスープはまずまずの味で、メインの assiette de mer (fruit de mer の簡略版) も要するに海鮮煮込みのごとき代物でとりわけ美味ではなかった。そうして思い出してみれば、前回の南仏旅行でも最高の魚料理に出会ったのは Cannes であって、ここ Nice ではなかったのだ。しかし夫婦で料理店の経営をしていると互いによく似てくるもので、夫の感じがいいと妻の感じもいい。このジnkスはめったに破られず、この店も例に漏れなかった。

フランスとイタリアの住居の違いは、第一にフランスには鎧戸がないこと、第二に窓を開けるノブの仕組みが違うこと。とくに後者がフランスに来た実感を強めてくれた。留学時代にさんざん開閉して、記憶に刻み込まれた手触りだから。

翌朝は7hに目覚めると、もうそれきり眠る気にはなれなくなった。9時間近く寝れば疲れは完全に取れており、おととい、きのうよりも体調はずっとよくなった。空は晴れ上がっているが道は濡れている。夜中に雨が降ったのであれば、それが一番ありがたい。

TGV は途中で機関車が向き合っており、駆け込み乗車では自分の予約席まで辿り着けない可能性がある。指定の先頭車両まで長くホームを歩く。終着駅は遠い Alsace の街 Nancy で、人々の運命の交錯を思う。定刻発車。

3 アルルからカルカッソンヌへ

Cannes に到着するまでは、斜め前のひどく上品かつ裕福そうで、えらく優雅にクロスワードパズルにペンを走らせるおばあさまと二人きりでいた。しかしここは有数の観光地。老人ばかりがどっと一等車両に乗り込んでくる。この駅からは再びトンネルに入り、20年前に見た Cannes の静寂極まる、油のような海は再会できることなく遠ざかっていた。

魅力的な名前を持つ海辺の街、St. Raphael 着。まだ満席には遠いが、二人掛けの通路側にやはり上品な老人が乗ってきた。隣に相客が座るのはこの旅行

ではじめて。ただし既述したように TGV の一等車両は 1 + 2 席のゼイタクな広さなので、気詰まりなほど接近するわけではない。

Toulon に着いてほぼ満席となる。Marseille に着くまでに二時間半掛かる長い移動ではあるが、時間を持て余しているわけではない。一日繰り下がってしまった日程調整だけでも相当な手間を食う。Toulouse に泊る予定を省こうとしても、惜しいという思いが働くだけでなく移動の関係で実質上不可能である。日本で半月掛けて練り上げた計画はそれだけ鉄壁なのだ。

Les Callanques のあたりなのだろうか、コバルト色の海とオレンジの屋根と緑の樹々が、眠い目を覚まさせんばかりに美しく広がっている。11h54、さすがフランス国鉄だけあって定刻に Marseille 着。ここから Arles まではローカル列車に乗り換え。

ホームに降り立ち、Arles までの汽車を掲示板で確認する。Toulon 行き（そのまま再録する。これがあとで問題になるのだ）、12h13発、3番乗り場から。フランスでは数字のプラットフォームがきわめて稀なので迷ってしまう。ようやく探し当てたのは A 番乗り場の先頭外れのホームで、待っていたのは丈が異様に低い老朽電車。半両20席分だけ用意された一等車両は二等車となんら変わらず、汚らしさは言語を絶する。一等料金分のサービスというわけでもなかるうけれど、ここだけが喫煙車両に指定されており、わけのわかった地元若者たち（もちろん一等料金など払っていない）がタバコを吸いに來るからたまったものではない。

いたずら書きで傷だらけになった窓ガラス越しでも、南仏の風景はこよなく輝かしい。われわれ日本人は山が見えると救われるのだ。カクテル材料で有名な Cassis を通過し、畑の背後に美しい岩山が聳えていたので撮影しておく。順調に過ぎたのはそこまでだった。

Arles 着が13hだったので、そろそろ降りる準備を始めた矢先、停車駅が Arles ではなかった頃から不審が芽生えてきた。しかし街が拡がり始めていた

し、多少遅れて到着するのだろうと再び着席した。さらに不審を拡大したのは海が（美しい海が！）見え始めたことだ。Arlesって内陸の街ではなかったかしら——。そこでパニックに見舞われた。電車を乗り間違えている！

近くのお嬢さんに Arles 行きかと尋ねると、返事は “Ça m'étonnerait” 「そんなばかな」。彼女は立ち上がりて路線図を示し、Toulon に向っている旨教えてくれる。そのとたん Toulouse と Toulon を混同していたことに気づいた。もちろん Marseille に着く前からの思い違いで、二時間前に TGV で Toulon を通ってきたことなどきれいさっぱり忘れ去っていた。すぐ降りなければ！ 次の停車駅は？ と問うと、Toulon。「何時に？」「あとちょっとで」。なるほど電車はその返事を聞か聞かぬかのうちに終点 Toulon に滑り込む。13h09。

二つの偶然が幸運をもたらした。一つは帰りの電車が3分後にあったこと、もう一つは Toulon の直前まで間違いに気づかなかったこと。なぜなら Toulon 発の電車は途中の小さな駅を飛ばして、Marseille 郊外まで停車しなかったからだ。50分ほどの帰りの車内では、間違いの原因探求に没頭してまったく退屈しなかった。旅程表には Toulouse 行きと書き加えながら同時に旅日記には Toulon と記してあり、そこに第一の混同がある。旅程表には12h12発とだけ書き込んであったので、たまたま運悪くあった12h13発の Toulon 行きに、なんの躊躇もなく乗り込んだのだろう。そして根本的な誤謬は旅程作成時に、Marseille 発12h56をなぜか12h13発と誤記した単純ミスであった。

Marseille に帰り着いてからは二つの仕事があった。第一に Arles のホテルに電話して、乗り換えの事情と遅れる旨を伝えること。そして第二に、今度こそ失敗は許されないからインフォメーションで Arles 行きの正確な汽車を知ることである。ところがそこで教えられた情報が混迷をいっそう深めることになった。自分で慎重に慎重を重ねて Thomas Cook を調べ上げた結果が15h10発 Lyon, Dijon 方面行き。一方、インフォメーションで教えられたのは15h05発 Bordeaux 行き。

狐につままれたように感じながら、もちろんインフォメーションのほうを信
用するしかない。フランスではプラットフォーム上で駅員や係員を捉まえるこ
とはきわめてむずかしい。汽車が駅を離れ5分ほどして車掌が検札に来るまで
は、おそろしく不安な時間が過ぎていったのである（結論的に言うと、西へ向
う15 h 05発 Bordeaux 行きも、北へ向う15 h 10発 Lyon, Dijon 方面行きも、と
もに Arles に停車するようである。長距離列車の前者に Arles 停車が記載され
ていなかっただけなのだ。それとしても先発する列車を教えてくれたインフォ
メーションが一言、「どちらでもいいが」と言ってくれたら気が楽だったの
に）。Marseille ~ Arles 間は急行で行くとわずかに30分あまり。

3日間の滞在を終えて Arles を去り、Nimes, Montpellier と、名のみ親しい
街を通過してゆく。そのうちに、まるでプロヴァンスの雨雲を逃げ去ってきた
かのようで、港町 Sète 到着時には陽が明るく差し込み始めた。ちなみに
Montpellier の発音が「モンペリエ」なのか「モンプリエ」なのか、昔から謎
に思っていたが（『歩き方』の記載ではモンペリエ。わがパソコンもモンプリ
エでは一発変換してくれない）、車内放送ではモンプリエと発音されていた。

それで思い出したが、Marseille の駅案内所で訪ねていたとき、c を英語と
同様「スィー」と発音するのでおもしろいと思っていた。そして今度は Arles
駅の構内放送で quai B (B 番ホーム) の B が「ビー」。南仏なまりではアル
ファベットの発音まで変わってしまうのだろうか。

12 h 32, Carcassonne 到着。さてこの街はオード川を挟んで、下町とシテ、
つまり広い新市街と狭小な旧市街に分かれている。『歩き方』所収の地図は後
者のごく小さな地図しか掲載しておらず、地図外の駅から後者にどうやって赴
くか、最初から困難を予測していたとおりに迷ってしまった。地方都市ではど
こでも、中心街をそれるとたちまち人に会わなくなってしまう。結果的にとん
でもない東の外れに到って、正面から歩いてきた男に道を尋ねた。親切な男

で、ちょうど仕事を終えて暇なので案内すると言う。30才くらいの彼とはいろいろなことを話した。英語、フランス語、スペイン語を話すと言う彼はアルジェリア人で、スペインに3年、イギリスに1年半いるうちに言葉を覚えたのだそうだ。

自分はレストランでウェイターをしている。夕食を食べるなら Hôtel de la Cité (シテ内の超高級ホテル) のなかに二つレストランがあるから、Barbacane のほうがいい。別の方は経験豊富なコックがやめてしまったから。cassoulet カッスーレが名物ですごくうまいが、高いよ。menu で30ユーロくらい。ぼくは別のほうのレストランで働いている。なぜこの街を選んだかって？ 自分で選んだわけじゃない。まあ、家族のせいだな。子供もいるし。物価は？ 食べ物はいいがほかのものは高いな。

そういうようなことを15分ほど喋り続けた。途中までで構わなかったのに、ホテルの位置を完全に確認することができる場所まで付き合ってくれたのである。それじゃあと差し出された手を握り、立ち去ろうとする彼に「あなたは serveur なんだから...」(フランス語のウェイターは「奉仕する者」を意味する)と2ユーロ渡す。いつもチップを貰いつけているので失礼ではなからうと言いつけて。ニッコリ微笑んで去った彼のおかげで、実際ずいぶん助かったのである。

『歩き方』に記されてあったとおり、Hôtel du Pont vieux はきわめて静かな一角にある。Pont vieux とは「旧橋」の意味で、新市街と旧市街を隔てる川に架かった石造りの美しい橋。その袂はすでにシテに属していながらも人通りはごく少なく、ほんのちょっと目を上げればこの古都を象徴する城壁が見渡せる。しかもホテルの部屋の調度はりっぱで、久しぶりにシャワーではなくバスに浸かることもできた。Venezia を特例としてつねに50ユーロ前後の部屋を狙ってきたから、街ごとの諸物価に応じて差がつくのも道理なのである。

洗濯を終え、駅までの道を確認してからもう一度ホテル前に戻り、いよいよ

城壁を擁するシテへの階段を上り始める。ちなみにここは世界遺産に登録されているという理由だけで選んだ街だから、思い入れはほとんどない。フランス政府観光局のホームページを引用して紹介しておこう。

「『カルカッソヌを見ずして死ぬな』と称えられるヨーロッパ最大の城塞都市『シテ』を中心とした都市。

スペインとの国境とほど近く、宗教的な争いや領土をめぐる争いが生じた際にカルカッソヌは要塞として利用されてきた。しかし、1659年にスペインとのあいだにピレネー条約が締結されることで要塞の役割はなくなり、次第に廃墟と化していく。

19世紀になってそのシテに注目したのは作家で歴史記念物視察官をつとめていたメリメ。そして、建築家ヴィオレ・ル・デュックの手により復元作業がはじめられ、現在では城壁内に1000人あまりの住人が住むにいたっている。

街の中心はシテの北西、オード川対岸の新市街地『下の街』（ヴィル・バス）に移ったものの観光的な見どころはシテに集中している。シテ内には6軒のホテルと1軒の民宿があり、中世の街を堪能することができる。」

文中のメリメは『コロンバ』『カルメン』の作品で名高い19世紀の小説家で、そういえば大昔にフランス文学史で勉強したかなと、記憶をかすかに蘇らせたりもしたのである。

階段を登るにつれて次第にオレンジ色の屋根が眼下に広がってゆくところなど、San Marino にそっくり。あそことは比較にならぬほど規模は小さく標高も低いけれど、城門をくぐったとたん狭い道に土産物屋がひしめき、観光客が雲霞のごとく寄り集まっている点も酷似している。まだ食べていない昼食はクレープで済ます（食わせる店が並んでいた名物かと期待させたが、味はごくおそまつ）。

Comtal 城からスタートするガイド付きツアーは16h15の回が満員（50名）で、最終17hまで待つことになった。それまでは見るべきものも大してなく、

時間を持て余し気味。見るべき絵もなく観光客でいるしかない街は、なにか居心地が悪い。雨雲を逃げてここまで来たが、時とともに雲が広がり、葉を揺らす風のおかげですっかり涼しくなった。

待った甲斐あって、Comtal 城の探索はガイド付きツアーに頼らなければならぬの意味もないことがわかった。一人では城壁内の塔に登ることさえできなかったのだ。心配された空も徐々に晴れ上がり、眺望は想像以上に美しかった。居並ぶオレンジ色の屋根の一部が一様に白く脱色していて、かえって色彩に趣を加えている。人々が中世以来の景観を守り続けてことに感動と感謝。ただ——ひたすら美しいだけの光景というのは、言葉を紡ぎ出させてくれない苛立ちを覚えさせるもので、これも San Marino で抱いたのと同じ感想なのである。

メガネの若く太ったガイドさん、喉が哽れてしきりに咳払いをしながら、各所で長々と説明をしてくれる。最後の回は人が少なくなると言われていたが、総勢40人はいただろう。英米人、ドイツ人は例によって多いから、フランス語ガイドを解さぬ者も多かったはずだ（フランス語ツアーは一日7回、英語ツアーは2回）。でも高い城壁から城壁へと移動しつつ、結構皆シンクロして頷いたり讃嘆したり。団体旅行ではこうして互いに親しみを育ててゆくのだろうと想像はつく。ぼくは御免だけれど。

50分ほどでツアーを終えると、残されたのは夕食ばかり。一番の人気スポット Marcou 広場では、わんわん響くくらいの人声が広からぬスペースを満たし尽くしている。その雰囲気気におされてもう少し彷徨してみたが、感じのいいレストランは皆19hの開店で、また広場に舞い戻る。先に遭遇したウェ이터氏推薦のレストランも、19h開店というだけの理由で見送らざるをえなかったのだ。

そういえばそのレストランが設けられたホテルを、ツアーのさなかに間近から見渡すことができた。オレンジ色の屋根を戴いたじつに渋い石造りの三階建

てで、樹々に取り囲まれ、カーテンの色調さえ上品であった。ちなみに宿泊料金はシングルでたったの250～315ユーロ。ぼくの部屋の7泊分程度にすぎない！

広場そのものの雰囲気が悪かったわけではないから、一軒のテラスに腰掛けることにした。過度の「広場の孤独」を怖れただけで、そんなものは飲めばすぐに忘れる。25ユーロの menu の一皿目は terrine St. Jacques（ホタテ貝のテリーヌ）。変哲のない一品ではあるけれど、テリーヌは今回の旅行でまだ食べたことがなかった。テリーヌそのものより付け合わせのブドウが夢のような味で、イタリアのときと同様、皮ごとむしゃぶりつく。

あまりにうまいので皿を下げに来たマダムに「ブドウはフランスではどこでもこんなに美味なのか？」と尋ねてみた。この地方がとくに名産なのかとも考えたからだ。マダム、マスカットには三種類あって、これは黒マスカットだからとりわけおいしいのだろうと答える。深い味わい。日本のマスカットは沈黙すべし。

メインは名物の cassoulet カッスーレ。ある解説よれば、「いくつかのヴァリエーションがあるが、基本的には、白インゲン豆をガチョウまたは鴨のコンフィ、豚の塩漬肉、ソーセージ等ともに土鍋で煮込んだもの」とある。貧乏留学時代に確か大学寮の食事が缶詰で食べていたから、なんたるかは知っていた。典型的な田舎料理で、シュークルートと同じくどんなにがんばっても上品で微妙な味など出しようがない。同じソースで煮込んだりっばな鶏が添えられているところが、メニューにわざわざ suprême（最高の）カッスーレと書かれていたゆえんか。

隣の席のグループに写真を撮ってくれないかと英語で頼まれ、“With pleasure” と応じた。その老人と話していると、こんなに自分の英語を理解してくれる日本人ははじめてだと妙に感心されたから、ぼくは大学教師で仏独伊語も解すると、酔いも手伝って答える。「専門は？」「フランス哲学である。ゆえに

多くのヨーロッパ言語を学ばねばならなかったのである。かくしてぼくは収まってしまったのである。彼のカメラのなかに！

夜は更けゆき、街路灯のオレンジ色のともしびを見ていると——今回の旅行で何度となく経験したことであるが——夢のような現^{うつ}のような、不思議な感覚に心が満たされてきた。ああ、ヨーロッパよ。

4 ボルドーよりラ・ロシェルへ

Lourdes からは車椅子の青年が乗り込んできて、その母親が甲高く早口の英語で飽きることなく喋り続けうんざりさせられた。フランス語を聞き慣れると歯切れのよい英語はひどく耳障りに感じる。10h 21, Dax 着。ここから汽車は Bordeaux に向けて大西洋岸をまっすぐ北上して行く。

この二三日、車内では旅程最後の検討を重ねてきて、最初からただパリへの途中というだけで宿泊を予定していた Tours の街が、ますますなんの魅力も感じられなくなってきた。Bretagne で過ごしたほうがいい。Normandie ならもっと好ましいけれど、こちらは時間的にちょっと無理だろう。日本にいたときから考えないでもなかった St. Malo への便を調べてみると、十分に訪問可能であることがわかった。Thomas Cook を参照しながらあらゆる可能性を検討しているうちに、例のごとく時間を持て余すどころではなく Bordeaux に到着する。

ホテルまで行くのに、苦手なバスを今回の旅行ではじめて利用することになった。めずらしく駅前ではなく街の中心に宿を選んだ理由は、第一に翌朝の汽車が10h 31までないこと。第二に「観光にも買い物にも便利。オーナー夫妻はいつもニコニコ感じがよく親切」(『歩き方』)と絶賛された安ホテル Hotel Touring が、駅からだいぶ離れたところに位置しているからである。いずこも変哲のない駅前通りを抜け、バスはまるで地理のわからぬ道を北上してゆく。停留所の標示がしっかりしているので乗り過ごす心配はなかったが、自分の足

で踏みしめない街はちっとも地理が把握できないし、表情を味わうこともできない。

降り立った Tourny 広場は六差路の中心にあり、交通量は多いがしゃれた雰囲気醸している。出迎えたホテルのオーナー氏は予想と異なり、今回の旅行では顔を見ることもめずらしかった芸術家か知識人タイプ。ただしどこか表情が冴えない。

ワインの街 Bordeaux に滞在するとあって、今晩は帰るなりベッドに倒れこむことが予想される。そう思えばそれなりに翌日の準備に時間がかかり、部屋を出たのは13hを越えていた。ちなみに宿泊代は38ユーロほどの最低クラス。シャワーが室内にあってトイレのみ室外の離れたところ、という組み合わせははじめてお目にかかる。当然のことながら部屋は狭く、調度と呼べるようなものなど皆無に等しい。

中心地に位置しているここでは、レストラン探しに苦労することはなかった。Allée de Tourny を通って、ひとまず中心の中心 Comédie 広場方面に足を運ぶと、途中のレストランでは昼間というのに皆しっかりした料理を楽しんでいる様子が見える。ワインの名醸地 Bordeaux が美食の街でもあるのかどうかは知らないけれど。

屋外のテラスは意外に少なく、手近なところで、ウェイターが全員蝶ネクタイをつけた高級そうな brasserie に入ってみる。パリを去って以来口にする機会のなかったカキがメニューに見えたものだから、もう辛抱しきれものではない。種類は選べず、6、9、12のいずれかの個数のチョイスがあるのみで、ぼくは9個注文し、ワインは Bordeaux の白、Dourthe No.1 の2001年ものを選ぶ。食後にチーズの盛り合わせを頼むと、りっぱな皿に豪華なラインアップで腹はすっかりくちくちになった。

この街は現在とんでもない惨状を呈している。バスの窓からも工事中の大きな広場が見えたが、美しい Grand Théâtre (大劇場) を擁する中心地 Comédie

広場周辺も工事の真最中。都市再興計画が進行中との大看板をあて目にするまでは、ずいぶんひどいところに来てしまったと嘆いたものである。街の東側を流れる大河 Garonne 川に出るにも、迂回に次ぐ迂回を余儀なくされ、その後しばらく北上してようやく美しい岸辺の光景を楽しめるようになった。

Garonne 川は、対岸に目を走らせさえしなければ海と見紛うほどの、たっぴりとした大河だ。岸辺もまた、広大な広場の連続と形容してもいいくらいの敷地を有している。岸には比較的大きな船が舫っており、レーダーの形などから遠目にも軍艦とわかる。前甲板には白い覆いが掛かっていて、撮影させないための艦装かと思えば、なんのことはない改装レストランに架された屋根である。後甲板に4門の大砲を備えたりっぱなフリゲート艦を、フランス海軍は退役後もアルバイトさせているのだろう。岸辺は逃げるべくもない日光の直射で、暑さが耐えがたい。

ホテルそのものが街の中心地よりやや北に位置しているが、『歩き方』所収の地図の北端まで川沿いを歩き、ワイン関係の二つの博物館を訪れるのがさしあたっての予定である。まずは Vinorama (ヴィノラマ)。「ボルドー・ワインの歴史を勉強するならここ。館内の人形をたどりながらワイン西方の歴史を見ていく。(…)ワイン好きな人は必見！」などと『歩き方』には書かれてあって、期待が高まるではないか。受付の安産型のおねえさまが、カセットは何語がいいかと問う。カセット？　ここでは小型のラジカセを客に持たせ、そこから流れる音声に従って順路を巡る仕組みだったのである。

これ以上は語るまい。まず出迎えた3体の人形からして寒い。掃除はいつしたのか、埃をかぶったすべての人形が寒い。二番目の部屋ですでに電気がつかず、真っ暗闇のなか、カセットの音声だけがむなしく喋り続けている。

前世紀の、というより前々世紀のテクノロジーですっかり身体を冷やしつつ順路を終えると、試飲用のワインの瓶が置かれている。ローマ時代のワインは、思いつき酸っぱく作って、砂糖と便所の香水を加えたような味だ。1850

年製のワインはヘッドが出るほどの甘さ。まあこれも話の種かと諦め、寒い心のまま最悪の博物館を去る。若い二人の係員はワインの発送に忙しそうだったから、こんなところを訪れるのは日本人ぐらいかもしれない。

近くに位置しているのが Musée des Chartrons (シャルترون博物館)。ワインの樽造りの工程を展示した天井の低い、アーチ型のアーケードを通して二階の展示室に赴く。今度は寒い人形が置かれていないだけ、だいぶマシと言えし。小まめに万年筆で記されたワインの注文書(18世紀のもの)、送り先各地の標識、古いワインボトルなど、それなりに興味を惹くものが展示されている。訪問者の雑帳にはここ数ヶ月で5人ほど日本人の記録があった。確かにここは、ぼくも含めワイン好きの日本人には、そこはかたない郷愁を抱かせる街なのだと思う。

一階には受付の横にギフトショップが設けられていて、陳列されているのはどれも購入意欲を湧かせるものばかりである。係のマダム、決して不快というわけではないのだが、生まれてこの方愛想というものを知らずに過ごしてきたような人物。その彼女が意外にも商売っ気たっぷりの熱心さで縷々説明してくれる。Bordeaux という土地柄でなければ買わなかったかもしれぬ品々を、めずらしく自分のための記念品として購入。

このマダム、日本人かとぼくに問う。日本人はフランス語はおろか英語も解さぬので、いつも gestes (身振り) でやり取りしているのだと、うんざりした顔。ぼくも少しは信頼回復に貢献しているのである。最後に “Je pars, sinon j'achèterais tout.” 「さあ、帰るよ。そうじゃないとみんな買っちゃうから」と言ったときだけ笑顔を覗かせたけれど、こういうカチカチタイプのうるさいフランス女性に、日本人客のほうはずいぶん閉口していることだろう。

あとは再び中心地を目指して、街の西端の大通りを南下して行く。交通量は多いが美しい並木道で、決して不快ではなかった。St. André 大聖堂まで来て、ようやく各所の大工事の理由がわかった。本年12月までの工期で(だい

じょうぶかな), tram (市電) の建設を含めて街の再開発をしているらしい。そのあとはレストランを探しながら, 街の中心地の見所のほとんどを見て回る事ができた。

今回はゼイタクな悩みがある。ここ Bordeaux でこそ一本50ユーロほど (日本に輸入されれば優に1万円は越えよう) のワインを飲んでみたかったのである。したがってワインのチョイスの少ない, おなじみの安 bar は避けなければならない。そこで, ある程度は覚悟していたように, 昼食を取った brasserie の裏を返すのが一番いいと判断した。昼間は満員で席につけなかったテラスはまだ空席だらけで, 二度目となると愛想もいい。

選んだ料理の一皿目は Tartare de saumon (鮭のタルタル) で, これはちょっと失敗。鮭は鮭でしかなく, 調理法もソースも工夫のしようがないようだ。量は吐き気を催すほど多い。メインは Foie de canard grillé aux fruits (鴨のレバークリル, フルーツ添え)。こちらは “C’était parfait.” 「完璧だった」との褒め言葉がまるでお世辞でないくらいの出来だった。焼き方の好みは尋ねずに最初からレアで, 持ち味を壊していない。付け合せが, いちじく, ぶどう (緑と赤の二種), リンゴの薄切りなのも気が利いている。こうした料理にはほのかな甘味が不思議に合うのだ。

肝心なワインは Bordeaux ものに高級品がなかったので, 近郊の St. Emillion ものを選んだ。St. Emillion Grand Cru Château Gâce Dieu (2000年)。ハーフで20,5ユーロだから, まあ Bordeaux でいちおうの夢を果たせたと見えようか。「神の恩寵」という意味のシャトー名もよろしい。食事前の Kir (食前酒) を飲むのはじめてなら, 食後酒に aramagnac (Domaine de Coquillon Le Flèche, 1986年) を楽しむのはじめて。この旅で最初のフルコースを, きちんと決めてみたかったのである。

メインを終える頃から雷が轟き始め, やがて土砂降りの雨となった。夕暮れが迫るにつれて雲行きが怪しくなってきたことには気づいていたが, またも夜

に雨の急襲である。フランスの街は雨降りに慣れていないと見えて、テラスに張り出した覆いのテントから雨粒が頻りに落ちてくる。これもお愛嬌とオツに構えていたら、店のマダムが「濡れている！」とイスに掛けていたばかりのスーツを指さす。ありゃあ、背後から攻撃されていたとは。

そのマダム、若くはないが明るくて気がよくて、抱きしめたいような人柄ではある。日本では大地震が起きるんだってねと言うから、“On ne sait jamais. Aujourd’hui ou demain.”「いつのことかわからないよ。今日か明日か」と大げさに答えておく。とはいえこの地でも地震はあったらしい。「いつ？」「大昔」。

ああ、なんら目覚しい記憶を残してくれなかった街、Bordeaux の夜は更けてゆく。61ユーロの夕食であった。

翌朝目覚めれば5 h 40。遙か彼方にしつらえられたトイレに身を運び、そのあとは不眠に悩まされる体力が残っていなかった。大雨が屋根を叩き続けていて、奇跡の晴天もついに崩れたかと観念したら、それは半覚醒で聞いていた隣室のシャワーの音だった。次に目覚めたのは8 h 50。駅までのバスが10 h 30に出るのでモーニングコールは頼んでおかず、おかげでかつてない遅起きをしながら、身体はかつてなく疲れている。駅までどれだけの時間が掛かるかわからないので、急ぎ目にシャワーを済ませ朝食に向う。

いともものんびりと給仕してくれる主人に、映画「冒険者たち」を見たことがあるかと尋ねてみた。「映画の後半の舞台となっているのは、ほんとうにラ・ロシェルなのか？」と。

こういうことだ。日本でイタリア旅行の計画を練っていて、港町 Genova まで進んだときのこと。ふと映画「冒険者たち」の舞台になっている港町はどこなんだろう、と思いついたのだから書かずもがなの注を入れておこう。「冒険者たち」は1967年封切りのフランス映画で、監督ロベール・アンリコ、主演リ

ノ・ヴェンチュラ，アラン・ドロン，ジョアンナ・シムカス。ぼくは翌年にまず名画座で見て以来、いったい何度この映画を見たか数えることはできない。なにせ去年一年だけで、ビデオで10回以上見ているのだから。後半の主要舞台となっているのが、とある港町の沖合に聳える廃墟の要塞で、今回のフランス旅行が目前に迫るまでそれがどこにあるのか関心を持つこともなかった。いざ気になってインターネットのサイトを検索し、諦めかけた頃ようやく日本のサイトで地名がわかったのである。La Rochelle！　なんと、今回の旅の途上ではないか！　さして見所があるわけでもないこの街を旅程に付け加えたのは、ひとえに映画の舞台を訪れてみたかったからである。ただし情報としてはこのサイト一件だけだったので、当地で再確認するまで正確かどうか確信が持てなかったのだ。

主人の応えは Oui で、小さいときにあの海上の要塞を訪れたことがあるという。ぼくはあわててその Fort Boyard なる要塞の名前を紙に書いてもらい、大切にしまいこむ。La Rochelle の観光案内所で尋ねたらいいが、あの要塞に渡る船が出ているはずだと主人。この人はやはり日本人受けする、丁寧で優しい経営者であった。「フランス語がじょうずですね」とお褒めの言葉を頂戴し、こちらも「あなたは芸術家か先生タイプですね」と言って別れる。前にも記したように、この手の物静かな知識人タイプにはめったにお目に掛かれなかったのである。

バスはすぐに来てくれたが、さて乗り込んでみて自動改札機の使い方がわからない。パリとは異なって、ただガッチャンでは済まないのだ（フランスではバスに乗ったあと、各自が車内の自動改札機でパンチを打つ。これをしておかないと違法乗車の罰金を食らうことがある）。往生しているぼくを近くのお嬢さんが助けてくれたが、これだからバスは旅人向けではないとますますイヤになる。

しかも覚悟していたように朝の渋滞につかまり、ホームに着いたのは汽車の

出発12分前で、辿り着くと同時に乗るべき Nantes 行きが入線してくる。本数が極端に少ないこの路線としては冒険してしまったものだ。もっとも接続の TGV の遅延とかで、出発は15分遅れることになった。検札に来たメガネの若い車掌さん、ぼくが渡したユーレイルパスをしげしげと眺め、透かしまで確認している（透かしなんて入ってたの？）。

全然期待していなかったのに、この路線の周辺は溜息が出るほど美しく、ビデオを持っていたら飽きることなく撮り続けたことだろう。走り始めて1時間15分にしようやく最初の停車駅 Santes に着く。農村地帯であるとはいえ駅は極端に少なく、鉄道がちっとも交通手段として役立っていないことを実感する。

La Rochelle への遅れは9分に縮まった。予約しておいたホテルへの途中にある観光案内所で、例の海の要塞 Fort Boyard を訪れることだけが目的だと告げ、遊覧船が運航していることを確認する。観光案内所のすぐ奥が bassin（港内ドック）になっており、海ネコが飛び交って旅情を誘う。

ホテル Hôtel de la Tour de Nesle はかわいらしく、おあばあさまも愛想がよく、三階の部屋からは教会と真下の運河がよく見渡せる。この大切な街で、よくぞいい宿に巡り会えたものだ。部屋からの風景をカメラに収める気になったのは、正真正銘これがはじめてなのである。一刻も早く港を見たくて急く心を抱えつつ、まずは洗濯。

港町の情緒をたたえた商店街を横目で見ながら、ひたすら港への道を急ぐ。目的はただ一つ、Fort Boyard への船便を調べることだ。船着場はすぐに見つかり、間もなく出航する14h 発と、一時間後の15h に便があることがわかった。昼食を取って15h 発がちょうどよからうと、港を見渡せる絶好のロケーションのテラスに座る。今日は久しぶりにサラダを食べるつもりでいながら、ムールの名を見るともう我慢ができない。シンプルな marines（塩仕立て）かクリーム仕立てかはいつも迷うところだが、今回は前者を選ぶ。この brasse-

rie がその名を取ったベルギービール, Leffe もこくがあってとてもおいしかった。

ゆっくり昼食を取っていると出航まで待つ間はない。旧港を出ると船は一挙に速度を上げ、一路大西洋へ。1時間45分の長い一周だから、街はやがて水平線のかなたに沈み込む。記録をつけるのに没頭していて、ふと顔を上げると海の要塞 Fort Boyard はあった。映画の演出とは異なって（とこの時点では思っていた）、港からはかなりの時間を要している。船はスピードを落として一周し、ゆっくりとその全貌を見させてくれる。工事のクレーンがやや艶消しとはいえ、ぼくの青春の証しであるような要塞がまぎれもなくそこに屹立している。いつかそれをこの目で見ることのできる日が来るなんて。揺れる舷側からフィルムが尽きるまで写真を撮りまくる。残念ながら今では上陸はできないようだが、再び次第に遠ざかり行く「つわものどもが夢の跡」に、ぼくは心のなかでいつまでも手を振り続けた。

陸に上がると、ごく狭いこの街、これといって見所があるわけではない。Tour de la Chaîne（14世紀にできた火薬庫である塔）には登ってみたが、値が高い割には丈が高いわけでもなく、数枚撮影しており。旧市街もいい雰囲気ながら港周辺にまさるものはない。18h30には船のマストを見渡す絶景のテラスに座り、食前酒 pastis を楽しみながら30分ほど時間を潰す。きのうと同じくオリーブを添えてくれるのがうれしい。

さて夕食。6,5ユーロのカキ（6個）はこの値段では身が豊かならず。Filets de rouget grillés au beurre d'anchois（アンチョビー・バターでのルージュエのロースト）も悪くはないけれど、骨をすっかり抜いたフィレでは物足りない。やはり少なくとも半身のゴロッとした姿にお目にかかりたいものだ。ただしレモンの上に添えられた塩辛いアンチョビー・バターが、魚とひじょうによくマッチして味を引き立ててくれた。これは新たな発見。pastisと同様、食後酒の calvados もすばらしく量が多く、これが地方料金というものだろう。ライ

トアップされた塔を見ながら、めずらしく残さずに食べられた夕食に多謝。

5 ナントからカンペールへ

7 h に起きて窓を開け、運河沿いの街の表情を見下ろす。もう人びとの活動は始まっているのに、日の出はますます遅くなっており、まるで夜と選ぶところはない。風は強いようだが傘をさしていない人の方が多い。きのう時折打たれた激しい雨は一段落ついたのだろうか。しきりにパリのことを考える。なつかしいわけではなく、旅がそれだけ終わりに近づいたということだ。

朝食のときにはじめて見たホテルのおじいさんも愛想がいい。『歩き方』を読んで予想したより高いホテルだったけれど、今までで最も快適なホテルとして記憶に残るだろう。「冒険者たち」の舞台を見に来たのだと、観光案内所と同じことをマダムに話すと、あの撮影が行われたのはここではなく、20 km ほど南の Fouras という街だというのだ。すると要塞を遠望できるあの小さな港も、あの「私設博物館」もそこにあった（あるいは今なおある？）のか！ バスはなくタクシーで行くしかないのだそうだ。往復でマラソンコースほどのタクシー料金がどれくらい掛かるのか、頭で計算しても想像がつかないが安くはなさそうだ。もしきのうのうちに聞いておくか、観光案内所で教えられていたら――。しかし愛した街のことだ、次の機会まで心残りがあったほうがいいのかもかもしれない。

傘をささなくても我慢はできるが、強風のもとで小雨が降り続けている。次にどこの街に泊るか、きのうの汽車のなかから考えあぐねていた。Nantes 意外に可能性はないのだが魅力に乏しい街で、とくに荒天となると時間が余ってしまいそうだ。Pont-Aven にまっすぐ行くには到着時間が遅すぎる。というわけで Nantes 駅前のホテルの予約を、きのうも今日もなかなか決断できずにいたのだ。ホテルのマダムの話では北へ行くほど天気が悪くなるということでもあるし。しかしともかくも今回の旅装がめっぽう雨に強いので心強い。ふと

思ったことだが、La Rochelle という地名は r の音を前後の l が挟んでいて、じつに響きが快い。Florence (Firenze のフランス語名) が耳に快いのと似ている。「雨の La Rochelle」なんて、まるで映画の題名。

マダムの情報とは裏腹に汽車が北上するにつれて雲を振り払い、Nantes 駅に着いたときには申し分のない晴天となる。ただし風がやや強いいためか、今までになく肌寒く感じられる。ところで問題は明日に予定している Pont-Aven への便だ。日本でやったパソコン検索と Thomas Cook の記載がめずらしく異なっており、いずこも同じ長蛇の列を覚悟の上で窓口に並んで確かめねばならない。しかも行列をようやく半分まで消化したとき、“uniquement départ du jour” 「本日の出発便のみ (の取り扱い) 」の標示が、列の先頭辺りに小さく掲げられていることに気づいた。もう並び直す気にはなれない。べつに切符を買うわけではなく明日の出発時刻を尋ねるだけなのだから、と自らを励ましてようやく窓口にたどり着くとやはりダメ。慣れっこになっていて今さら驚きはしないが、自分の分担以外には絶対に手を出さないフランス人の姿勢は徹底している。腹を立てるだけ損なのだ。

この駅は南口と北口に分かれており、街の地図を見ると南口はなにも見所のない地区に通じている。北口の窓口に並び直すのはやめ、長い地下通路を抜けて南口へ。案の定、がら空きの案内所では、やけに派手な化粧と目つきをしたおばさまが丁寧に調べてくれた (当たり前だ。なんのための案内所だ !) 。親切にプリントアウトしてくれた乗り換え表を見ると、日本で検索したものと今日 Thomas Cook で調べたものとも異なっている。

こういうことだ。Pont-Aven に国鉄駅はなく、Quimperlé からのバス便に頼らなければならない。Nantes からの汽車をまず Redon で乗り換え、次いで Quimperlé で乗り換えるのではないのか。ところが渡された表では Redon 乗り換えまでは同じだが、その先 Quimperlé を通り越した Quimper でまた乗り換えることになっている。係のおばさまが怪しく目をまばたきさせつつしてくれ

た説明は要領を得なかったが、表をよくよく眺めているうちに謎は解けた。Redon ~ Quimper 間は TGV に乗り、Quimperlé までわずかな距離をとんぼ返りする設定になっているのだ。なるほどこういう時間の短縮法は、Thomas Cook では気づくものではない。TGV の予約も待ち人なしで完了。

こうなると問題はあすの Pont-Aven のホテル予約だ。当地の観光案内所に電話をすると、ホテル予約可と『歩き方』には書かれてあるのに、ホテルの電話番号を教えるから自分で掛けろという。そんなこともあるかと日本で Pont-Aven のサイトをプリントアウトしてきていた（『歩き方』にはホテルの記載がなかったのだ）。一軒電話してみると「あす、土曜日ねえ……満員！」とつれない返事。もう一軒、値段が高いので避けたかった三ツ星ホテル Les Roz Aven は留守電。残りの一軒は星なしの超安ホテルで、さすがのぼくもこれは見逃すことにして Les Roz Aven に電話が通じるのを待つしかない。ここであつやく駅前に予約したホテルに赴くことにする。この間、駅に降り立ってから 1 時間 20 分が経過！

部屋はまだ掃除中で荷物だけ置かせてくれるという。よろしい。さいわい洗濯物はすべて洗い立ての宝の山だ。駅前は何延びしただだっ広い広場で、商店めいたものが何一つない。この街最大の見所の一つ St. Pirre 大聖堂まで行ってもカフェがなく、少し離れたところに二軒固まってあるのを見たときはほとと息をついた。

といってうまそうなものを置いているわけでもない。ここはもう北の街なのかクレープが売り物のようだが食指が動かず、これまた食欲の湧かぬクロック・ムッシューに甘んじる。食べるのは若いとき以来だが、さほどまずいものではなかった。せっかくのフランス滞在も残り少ないのでビールとワインはケチらぬこととし高級品を選ぶ。絶対に常連しかやって来ないカフェでの食事というのも、なかなか味わい深くていい。10,9ユーロなりの超安値。

昼食後は St. Pierre 大聖堂、ブルターニュ大公城と見所を回る。前者は内

部のアーチ型の白い列柱が美しいが、1972年の大火のあと新しく建て直したということで、ありがたみは薄い。後者も中庭を見学できただけで見所の塔には登れない。ここで堪忍袋の緒が切れた。どのみちやむをえず宿泊地として選んだだけの街だ。逃げよう！ ジュール・ヴェルヌ博物館にはちょいと未練もあったけれど、それだけではとても時間を潰しきれない。さいわい15h30発のLe Mans 行き列車があり、それに乗れば45分で Anger に着く。さして魅力を感じない街だが、城ですばらしいタピスリーを見れば気が済むだろう。

Le Mans 行きは53番ホームからの出発。それから予測できるように、たった二両編成の郊外電車で、発車5分前に駆け込んだ一等車両は例によって料金を払っていきそうにない乗客で溢れている。しかし、あるまいと思っていた検札がすぐに始まって、ほとんどの乗客は二等へと去っていった。追い立てるだけで罰金を徴収するわけでもないから、こういう輩があとをたたないのだ。しかも車掌の姿を見かけてすぐ逃げ出すどころか、検札を受けるまで平然と腰掛けしている。フランスらしい情景。

せっかくの好天が St. Pier 駅を出た途端に一変し、以後は小雨が降り続く。天候が安定しなくなっているのだ。Anger 駅に着いてみると、観光にどの程度の時間が掛かるか予想がつかかねて、帰りのTGVの予約を19h30、20h30のいずれにしておくかで迷った。ただし夕食を取るなら後者しかなかろうと覚悟を決める。Anger ~ Nantes 間はほとんどTGVしかなく、どうしても長蛇の列に並ばざるをえない。

ところが今度は「本日分」と「予約」の二列に分かれている。「本日の予約」はどっちに並んだらいいんだ！ めんどうなので短い予約の列の後につくが、その非能率なこと！ 第一の理由は自動販売機がないことであり、第二は一人ひとりに掛かる時間がやけに長いのだ。思わずハーと溜息をついていると、前のおばあさんが「今日は金曜だからね」と声を掛けてくる。なるほど、週末旅行の予約と考えれば納得がいかないでもないが、駅窓口の行列は毎回途

切れていたためしがない。ようやく予約を終えて切符を確認していると、先のおばあさん、「あら、あなたのほうが早かったのね。私は老人のなんとかを持っていたんだけど」などとまた話し掛けてくる。こちらも道を尋ねるときなどは老婦人が多く、親切に教えてくれて外れたためしがない。

構内から出て、遅い時間に予約したことをたちまちのうちに後悔した。相当に激しい雨が降りようなのだ。前記のように雨にめげないだけの格好はしているが、心の晴れやかさは著しく減じる。街に飛び出すときにいつも感じる口笛を吹きたいような気分が味わえないのだ。この街の見所はただ一つ、アンジェ城だけなので真っ先に駆けつける。そこでは14世紀に制作された縦5m、長さ107mに及ぶ「ヨハネの黙示録のタピスリー」が待っているはずだ。

狭い切符売り場兼ギフトショップでは、それまでまったく目にしなかった観光客が群れている。でもなにかおかしい雰囲気を感じ、切符を買うのはここではないのかと尋ねると、“Fermé”「閉館」の一言。眼前暗転。今日は終日閉館か？ の問いに、17hに。今がちょうど17h！ Anger まで足を延ばすという天啓に心を奪われて、城の閉館時間までは確認しなかったというオソマツなのだ。“Wow!”とおおげさに天を仰ぐぼくに、係の美しいお嬢さん、気の毒げな笑顔を返してくれた。絵葉書で見るタピスリーは想像をはるかに超えて美しく、6枚も選んだその手がむなしい。

旅慣れてくると諦めも早くなる。気を取り直して St. Maurice 大聖堂へ。教会には見慣れた目にもここは格別に美しかった。優雅な外観もシンプルな内部もいい。目が慣れるまでは気づかなかったステンドグラスが、シャルトルに匹敵するほど壮麗なのだ。一つの教会を9枚も撮影したのはめずらしい。

さてあとは目的もなく街をぶらつければいい。ここはどこかパリの匂いを感じさせる街で、白い建物の並びにも「小パリ」という以上の気品が感じられる。アルザス風の構えをした骨董店も、CANDIDE という名の古本屋もカメラに収められた。『歩き方』所収の小さい地図片手ではいつしか迷い、「定番」の老婦

人に二回、いとも丁寧に道を教えられて駅前通りに帰還。

夕食は行きがけにいいところを見つけておいた。タルタルをスペシャリテとする brasserie で、定番の牛肉に加え、veau 子牛、autruche ダチョウ、bison 野牛と取り揃えられており、躊躇なくそこに決めた。前菜はエスカルゴ（半ダース）。タルタルの調理は、自分で味付けするケース（ほとんど）と、してくれるケース（まれ）があり、ここは後者。「ちょっと強めに」と頼んだ味付けがまだ物足りなかったのだから、よほど塩気に飢えていたのだろう。常連だらけの店のやたら陽気な主人に、「ぼくはタルタルが大好きなんだけど野牛を食べたのははじめて。今日はぼくの記念日だ」と告げて別れる。食後酒を楽しむ時間は残されていなかったけれど、タピスリーを見られなかった無念をだいぶ晴らしてくれた。

食事中こそ半袖一枚になっていたものの、表に出れば風が冷たい。18h30に標示されていた気温は15 だった。緯度からすればパリとさほど異ならぬこの地、こうやって一雨ごとに寒さが加わっていくのだろう。5分遅れで到着したTGV は、さすがパリからの汽車とあって bar の標示が見える。Nantes までは40分の駆け足にすぎないので、はじめて車内のピュッフェを体験してみるのもいいかなと思う。新幹線のピュッフェと同じでまことに味気ない内装だが、食後酒がわりにスコッチを飲んでいれば、なんとなくほんわりした気分になってくる。TGV の予約は一等車両でもつねに1,5ユーロと安いのがユーレイルパス旅行者の身にはありがたい。

昨夜ホテルの部屋に帰り着いてすぐ「異変」に気づいた。浴室に干しておいた靴下がないのだ。昨夜は掃除前に入室していたので、掃除婦のひとがどうかしてしまったことは間違いない。8h10に起きても気掛かりはそのこと（わが靴下はフランスで買い直しの利かない登山用のものなのである）、問題はフロントでの切り出し方だ。「靴下が届いちゃいませんか」という言い回しがなか

なかむずかしい。記憶を掘り返して、“On ne vous a pas rapporté une pair de chaussettes?” に行き当たったのは満点。

フロントはすばらしく早口の若い男で、ただちに確認したのは手書きのノートである。掃除係からの報告の一覧でもあろうか。そして返事は、「確かにある」。旅の終わりに差し掛かるとわずかなツキが気になるものだ。Nantes の街のつまらなさ、Anger でタピスリーが見られなかったこと、それに加えて靴下の紛失か——そうした気分も一挙に吹き飛んで行った。

Quimper 行きに乗り込んだのはいいが、じつは今日の行動予定がまだ定まっていなかった。昨日のホテル予約の失敗で、Pont-Aven に一泊することはほぼ諦めていた。しかも Quimperlé からのバス便さえまだわかっていない（現地の観光案内所はそれを把握していなかった。ホテル予約の労も取らず、重要な交通手段も把握せず、いったいなんのための案内所！）。あえて危険を冒してまで Pont-Aven に赴くべきか弱気になりながら、身体が地図どおりブルターニュ半島の突端に向けて西に引き寄せられる感覚を味わう。

Quimper が近づくにつれ、左右をうっそうとした森が押し包んでくる。海沿いを回ってきたせいかこういう景色を目にしたことがなく、ひどく新鮮なものに感じられる。そうしたなかで明日以降の予定を決定。Quimper のあとは一挙パリ方面に戻って Tours に泊る旅程を組んでいたが、魅力の感じられないこの街はやめてブルターニュをさらに北上することにした。かつて真冬に訪れた St. Malo を秋に再訪してみたいし、その後 Mont St. Michel へのバス便もあることが判明した。長かった旅の終わりを北の海で締めることができそうだ。

Pont-Aven での探索を終えてバスを待っていると、始発の停留所でもないのに定刻にバスがやって来る。「前払いか？」と問うと、好意をどう表現しているものか探しあぐねているような、いい笑顔をした中年運転手氏が頷く。ホテルの主人がそうだった。笑えば目が切れ目だけになってしまう笑みを満面に浮かべ、鍵の開け方閉め方、夜帰ってきてフロントが閉まっていたときの入り方

など、説明するのがうれしくてしょうがない調子で教えてくれたのである。

こんなこともあった。あすは早出なのに、外出を急ぐあまりモーニングコールを頼むのを忘れていて、Quimperléの駅からホテルの主人に電話を掛けた。すると部屋の時計を自分でセットすることになっているのだが、と言ってから、「じゃあこれから私が部屋に行ってセットしておきましょう。そのほうが安心でしょ?」あの笑顔が目に浮かぶような喋り方である。小説風に言うなら、主人は「この旅ではじめて抱きしめたいと思った男」であり、プルターニュの印象を決定づけた男でもあった。

バスのもともとの乗客は2、3人にすぎず、Pont-Avenの停留所から乗ったのもぼく一人。少なくなかった観光客の大部分は、車で帰ったか宿泊しているのだろう。確かにここは静養にうってつけで、慌しく訪れて立ち去る街ではない。ホテルの予約ができなかったことが返す返すも悔やまれる。運転手氏、ラジオを大音声でかけながら遅い車を追い越し、駅への道を疾走する。それでもダイヤより5分遅れで駅に着いたのだから、バスまで殺人的なスピードで飛ばす理由が領ける。駅に帰り着いたのが18h40。19h05発の汽車までbarで時間を潰すまでもなかった。

今日から一挙に秋になった。ホームで待てないほどに冷たい風が吹き抜けてゆく。ぼくにとって真の「秋一番」であり、待ち焦がれた秋が到来したのだ。ここはフランスにはめずらしい山間の駅で、日本を、とりわけかつて汽車を待っていた上州の駅を思い出させる感情は「なつかしい」に近い。やがて汽車が来て、同じ道をQuimperまで運んでくれる。

Quimper駅に戻って、これからようやくこの街の「観光」が始まる。といっても、800mほど離れた大聖堂までレストランを探しながら歩いてゆくだけだ。もう日は暮れているので、残念なことに北国の情緒を味わうことはできない。

ちなみにここを県庁所在地とする県を Finistère という。「地の果て」！ フランスの地図を眺めれば、北の果てにブルターニュ半島が大西洋へとぐいと突き出していて、その突端付近にこの街が位置している。それから先は海しかない土地。程遠からぬ Carnac にはメンヒル、ドルメンの巨石群が大地を圧して、タクシーでしか回れないのでなければ、そしてもっと時間的余裕があれば、どれほど訪れてみたかったことだろう。地中海の明るさともイールドフランスの豊穡さとも違う謎と神秘が、Finistère には染みついている。

きわめて小さな街で人通りもなく、レストランの類いは困惑を覚えるほどに少ない。夕闇が押し寄せている St. Corentin 大聖堂近辺の bar では、照明の明るみのなかで地元の若者たちが騒いでいる。寒さでテラスに腰掛けられなくなると孤独が始まり、まだ満腹の状態では食べるべき料理にも迷う。クレープ屋は少なくないが、これは明日の St. Malo に残しておかなければならない。

しかし一軒のクレープ屋がヒントを与えてくれた。オムレツを食べよう。これなら量もほどほどだし、卵の欠乏は常々感じていたのだ。たまたま選んだ一軒は、店主がフランス人としてはめずらしくひじょうに小柄で、気の弱い顔つきをしている。いにしえのシャルル・アズナヴールといったところ。日本の茶飲み茶碗によく似た茶色い陶器の碗は灰皿ではなく、シードルを飲むためのもので、boleé という名であることも教えてくれる。もちろんビール代わりにシードルを飲む。さすが発泡性と酸味が強く、活きている！ と唸らせる一品であった。

オムレツは卵の数（2，3，4個）と、中に入れる具と、二重のチョイスになっており、一皿だけの夕食なので3個を試してみる。具としては値の高い chorizo の意味を尋ねてみると、ソーセージの一種とのことでそれを選ぶ。だが発音はショリゾーなのかコリゾーなのか。店主に聞くと、そんなことは考えたこともなかったという顔をして、チョリ、チョリ...と口のなかで転がす。なんだ、ぼくの好物のチョリソーかと気づいたのは、口のなかで咀嚼していると

きだった（後日談。chorizo の原産地スペイン語での発音はチョリソーであり、フランス語の辞書にはチョリゾー、チョリソー、ショリゾーの三種類の発音が載せられている。ch と z の発音がスペイン語とフランス語では異なるので、外来語 chorizo の発音は一定しないものと見える）

オムレツの大きさは日本の基準から考えれば特大だが、チョリソーのほかは玉ねぎ、ミニトマト、ピーマンしか入っていないシンプルな料理で、するすると腹に収まってゆく。同じ皿にはレタスも大量に盛られてあって、素朴なることこの上ない。地方の特産料理とは結局、贅沢を知らなかったいにしえの名残りであると再確認する。

6 サン・マロからモン・サン・ミッシェルへ

きのう「秋一番」について書いたが、今朝の寒さはシャワーで震え上がったくらい厳しかった。10月というのに、これまでテラスで食事をし続けることができ、真夏のTシャツで過ごせた暖かさが異常だったのだろう。Chamonix 以来、久しぶりに長袖Tシャツの出番となる。

シャワーを浴び整理を終えると、汽車の発車まで30分しか残されていなかった。慌てて朝食を済ませて外に出れば朝焼けが迎えてくれる。La Rochelle 以降は多かれ少なかれ雨にたたられてきたけれど、これはすばらしい好天が期待できそうだ。

Quimper ~ Redon 間は来た道の完全な折り返しである。ほんとうはフランスの西の果ての街Brestを經由し、ブルターニュ半島の北端を回って St. Malo に到りたかったのだが、時間がかかりすぎるために断念せざるをえなかった。このTGV は Redon まで戻ったあと Rennes へと北上する。ぼくはそこで乗り換え、1時間18分の長時間連絡待ちののち、さらに北上して St. Malo へと向う。

Rennes 駅の窓口でも一騒動あった。行列そのものは長くないのに、進行が異様に遅い。19もある窓口のうち二つしか開けていない（！）せいもあるが、

各人にひどく手間取っているのだ。ようやくと列の先頭に立ったと思ったら夫婦が息せき切って戻ってきて、係員が間違った切符を渡したので一番前に割り込ませてくれと頭を下げられる始末。

かくいう私も、今回は時間がかかった。昨日の Quimper で TGV を予約するとき St. Malo のホテルも紹介できるがどうかと尋ねられたのだが、それは Train + Hôtel と名づけられた割引プランであった。St. Malo は『歩き方』の割引があるので断ったが、それを今回は利用してみようかという気になった。行動を束縛されないようパリのホテルを決めておらず、次第にそのことが気掛かりになってきたからである。

Ibis という検索サイトだと係が言っていたが、無数にあるパリのホテルのうちどれほどをカバーしているのかはわからない。最初に紹介されたのは名前に記憶がないでもない高級ホテルで、3泊で600E（！）では話にならない。次々と検索してくれたホテルも安いものはみな満室らしく、「ハイシーズンだから」という彼の言葉を聞いて諦めることにした。遅くなるほどリスクは高くなるが、パリに着いてからのほうがチョイスは多いだろう。

かくするうちに行列の先頭にいる若い男が顔を真っ赤にして怒鳴っている。無理もない。ぼく自身も窓口に達するまでに30分を要したのだ。politesse の一語だけは聞き取れたけれど、「いつまで待たせやがるんだ。客に対する礼儀（politesse）をわきまえろ！」とでも叫んでいたのだろう。一つ補足しておくと、フランス人は不思議にキータッチが遅い（タイプライターの時代から慣れているだろうに）。コンピュータの画面は見えないが、立ち上がりが遅いようならそれだけ時間がかかる。係員が客の大行列など歯牙にもかけていないことはいずこも同じ。さらに補足しておけば、いかに非能率に慣れた（慣らされた）フランス人といえども、先の若い男ほどではないにせよ、愚痴を言ったり溜息をついたり、日本と同じ光景である。

心から気に入ったブルターニュのなかでも、Rennes ~ St. Malo 間の路線は

一段と美しさを増している。潮風にさらされる北の大地は豊かな穀倉地帯でもある。ポカリと浮かんだ綿雲で青さの深さを強調された空のもと、牧草地に寝転ぶ多くの牛たちの姿が見える。カメラを構えると逃げてゆく風景ばかりで、写真に収まってくれないのが惜しい。

北の港町 St. Malo は城壁で囲まれた旧市街で名高い。訪れたことのない人にはイメージが湧きにくいので、フランス政府観光局のホームページから引用しておこう。

「エメラルド色に輝く海が広がる高級リゾート地として名高いサン・マロ。16世紀にはコルセールと呼ばれた、敵船を襲い、荷を略奪することを合法とされた海賊たちが活躍。そのおかげで17世紀末にはフランス随一の港町として繁栄をきわめた。サン・ヴァンサン大聖堂を中心とした旧市街は12世紀に築かれた城塞にぐると囲まれ、豪華な石造りの建物が軒を連ねる。潮の干満の差が非常に激しく、長い間コルセールたちはサン・マロが敵の手に渡ったことのないことを自慢したが、第二次世界大戦では街を占領したドイツ軍を撃退するため、アメリカ軍の爆撃を受けてとうとう壊滅。城塞だけが残った。戦後、瓦礫の石をひとつひとつ積み上げて街を元通りに再現したサン・マロの人びとのパワーには驚かされる」。

城壁に囲まれた旧市街は駅から1.5キロ離れており、そのせいで歩く者は少なくタクシー乗り場に長い列ができています。もちろんぼくの足では一歩きの距離で、ヨットが舫っているハーバー脇の一本道をまっすぐ城壁に向けて進んで行く。当地は20数年ぶりのセンチメンタルジャーニー。遠くから城砦を眺めていたときは記憶と異なっていたが、Grand Porte（大門）を抜けてなかに入れば懐かしさがこみ上げてくる。

城壁は縦6～700m、横4～500mの歪んだ長方形を形作って海に突き出しており、すっぽりそこにおさまった区域が旧市街と称される。東と南は人工的なハーバーに囲まれ、西面だけが砂浜を見下ろす。ここに到るまでに駐車場が設

けられていて、車が通らぬ狭い通りを観光客が埋めつくしているところは San Marino や Carcassonne に酷似している。あれらと同様、小さいスペースに楽しさと魅力が凝縮した街なのだ。

城壁の真下の細い道、とりわけ大門から100mほどは、左右とも一軒の例外もなくシーフードを売り物にしたレストランで賑わっている。なにより先に見つけたかった22年前に泊ったホテルを、意外にも簡単に発見することができた。ロケーションにはっきりした記憶はなかったが、城壁の真下の道を進んで進行方向の行き止まりに、まさしくそれがあったのだ。併設のレストランでシーフードを堪能したことはきのうのこのように覚えており、構えもガラス越しに見える内部も間違いようはなかった。今夜の夕食はもちろんここで取りたいので、まだ昼の部が営業中のなかまで入って夜の開店時間を確認しておく。

きのう予約した本日宿泊のホテル、『歩き方』推奨の Hôtel du Louvre もそのすぐ近くにあった。前回と同じ宿なら...との期待は裏切られたものの、若いフロントは今旅行一二を争う感じのよさで、ホテル自体も申し分ない。エレベーターは旧式、室内もゆったりとして古めかしい調和を持っており、バスを備えた水回り空間も快適に広い。ホテルはかくあるべし。

今日は洗濯物が溜っているので、はやる心をなだめつつ精を出さねばならない。立ちっぱなしの作業は辛く、早く乾かさんとして強烈な絞りを何度も加えるからよけいに時間がかかる。ようやく一息つき、さて久しぶりにスーツを着るべくザックを掘り返していて、もう一足汚れた靴下が出てきたときの絶望感！ 今度ばかりは洗濯に一時間も要したのである。

15h過ぎにホテルを出て遅い昼食の場所を探す。じつはホテルと同様、前回食事したのと同じクレープ屋が見つかればいいと思っていて、ホテルを出て間もなく、坂の途中で見かけたものに間違いないと直感した。ただ残念なことに当時の記憶と異なって甘くないクレープは置いていなかったの、散歩をしな

がら旧市街を南下して行く。

いずこも同じで次第に食べ物屋が稀になるなか、一軒、地元民がカウンターに集った雰囲気の良い bar が見つかる。メニューを覗けば soupe de poisson（魚スープ）があるではないか！ 今これを食しておいて、夜 fruits de mer（フリユイドメール＝貝類、エビ、カニなどの盛り合わせ）を食べれば申し分ない。食事なら二階にどうぞと案内されたが、さっきぼくの気持ちを惹きつけた港町の雰囲気が消え失せており、カウンターに戻る。

同じ soupe de poisson でも一軒ごとに味が違うものだ。ここはまったりとしたクリーム味で、コクが強い反面、塩気が少ない。飲み物はもちろんシードル。夕食を控えて満腹にはなりたくなかったけれど、クルートンとチーズを浮かべたスープの抗いがたい誘惑！ すっかり満足し、4,5ユーロの勘定にチップ込みで5ユーロを置いて店を出る。

ようやくにして城壁の上の遊歩回廊に登ると、前回の真冬の暗い海とは打って変わり、輝く西陽のもとエメラルド色の大西洋は限りなく明るい。砂浜に降りて散歩している者も多く、海水浴客がいてもおかしくないような錯覚に陥る。餌を目指して集まるウミネコや、小さな島々に打ち寄せる白波に感嘆しつつ写真を撮っているうちに、城壁一周の散歩はほどなく終了してしまう。あとは旧市街にひしめいている土産物屋を覗き、ステンドグラスが美しい St. Vincent 大聖堂を見れば観光は終わったも同然。狭い区域なので要した時間は少なかったが、それでもすでに18hになっている。気持ちは十分に満ち足り、いつもならテラスで食前酒を楽しみつつ時を過ごしたことだろう。しかし大西洋を吹き渡ってくる風はすさまじく冷たく、レストランが開くまで、目と鼻の先にあるホテルへ一時撤退と決める。

この冷たい風はいつから吹いているのかとフロントで尋ねると、やはり数日前からとの答え。北の海から秋は深まって行くのだろう。ちょっと一休みとベッドで毛布にくるまれば、数分もしないうちに眠りに引きずり込まれる。

目覚めて折よく19h10。レストランは思い出の店と決めていたが、先にメニューを立ち見したときから迷い続けていた。かたや、カキ1ダース+メイン一品+デザートで20,5ユーロのコース。かたや単品で23,5ユーロのフリュイドメール（ただしカキ半ダースを含む）——。夜の部の開店直後だというのに、店内はもう客が何組もテーブルを占めており、前回座った窓際の席もすでに埋まっている。『歩き方』にレストラン紹介の項目はなかったけれど、ひょっとしてここは名店の一つなのかもしれない。そういえば auberge（レストランを兼ねたホテル）というもの、最近は少なくなったようだ。

自家製の食前酒をちびちびやりながら、もしコースを選ぶとすれば、メインは魚のシュークルートにするか côte d'agneau（子羊の骨付きあばら肉）とするか、とさらに迷う。しかし悩む必要はなかったのだ。Chamonix で特産のチーズフォンデュを二人前からしか注文できなかった不思議はすでに記したが、当地でもこのレストランを例外としてフリュイドメールはなぜか一人前では食べられない。正確に言えばフリュイドメールには asiette de fruits de mer と plateau de fruits de mer があって、日本風に言えば前者は「刺し盛り」、後者は「船盛り」や「大漁盛り」に相当し、少なくとも後者は二人前以上からの注文となっている。もちろん北の港町まで来て後者を選ばぬ手はないのだ。

かくして我が腹に収まったものは、半ダースのカキ、カニ、2種類のエビ、多種類かつ大量の貝類。フリュイドメールを食するときは両手が汚れるから日記を書くこともかなわず、ひたすら eating machine となる。旅の途中から、魚介類にはソースはもちろん、レモンをかけるのもやめるようになっていた。本来の塩味だけで食べるのが一番なのだ。ワインも、数ある白ワインのなかで二番目に高い Sancerre のハーフを張り込んでおいた。来てよかった。食べてよかった。満足した。葡萄酒と魚介類を創ってくださった神様に、感謝感謝の一夜であった。

昨夜は早めにホテルに帰って熟睡することができた。かくして再び疲労から回復してゆくのである。バスに湯を満たしながら、きのうから迷っていた今日の旅程を整理し直す。迷いの理由の第一は、Mont St. Michel に行くのはいいとして、はたしてあそこで丸一日過ごせるかどうかということだ。いつもの健脚からして、あの「江ノ島」で一泊するまで時間を潰せまい。第二にあそのホテルがやけに高く、『歩き方』推奨のものは予約する気にもなれないほど値が張ることだ。ぶっつけ本番で安宿を探すつもりになってはいるけれど、重いザックを背負いながら首尾よく行くか保証されているわけではない。最後に、パリまでの旅の最終日である明日、Mont St. Michel から Rennes に出るには不便なバス便に頼らねばならないという欠陥もある。

もし時間的余裕があって滞在地を気ままに選べるなら、Normandie の北のはずれに赴いたことだろう。しかしかねてから Thomas Cook で調べておいたように、すでに訪れて魅力を感じなかった Caen 程度にしか足を延ばせない。では Cherbourg なら？ ただの軍港の街でしかないことは若いときから承知している（『歩き方』にも街の紹介はない）。しかしあの頃から、一度、ただ一度だけでいいからこの目で見たいと思ってきたのだ（ああ、「シェルブールの雨傘」の代表的な患者！）。

しかし結局、Normandie 北部も Cherbourg も断念しなければならなかったのだ。その理由をはっきりしている。北の海に突き出した St. Malo はどこに行くにも Dol というきわめて小さな駅を経由せねばならず、そこからの連絡が絶望的に悪いのだ。Rennes まで出なければ TGV に乗れないことも大きい。あらゆる可能性を考察し、再考し、ここ St. Malo にもう一泊して Mont St. Michel にバスで日帰りするのが一番だとの結論に達した。

朝食前にフロントで連泊できるかを問うたところ、例の青年が“Avec plaisir.”「よろこんで」と心からうれしそうな笑顔。「フロントの対応もよく」と

『歩き方』に記されていたとおりで、繰り返せばとりわけ異邦ではこれがきわめて重要な要素となる。バスは10hに出るので、量も程よい朝食をゆっくりと終え、それでもなお30分近く港で時間を潰す。その間、朝方はすばりしかった空が急速に曇って雨が落ち始め、「いじわるだなあ」と呟いたものであった。

東に向かうにしたがって雨は激しさを増してゆくが、バスの旅にはいつも格別の楽しさがある。旧市街を出てから、St. Malo の街は想像を超えて大きく広がっていた。城壁内よりずっと安いはずのホテルやレストランも立ち並んでいて、真冬の前回はもちろん、今回も Mont St. Michel までのバス旅行を思いっかなければ知ることのなかった街の姿に見とれ続ける。幹線道路は内陸の鉄道に沿っていると思われるのに、St. Malo ~ Mont St. Michel を最短距離で結ぶこの路線はブルターニュの海岸線をたっぴりと堪能させてくれるのがうれしい。

例にたがわずバスは飛ばしに飛ばし、やがて左手に写真で見慣れた修道院の姿が浮かび上がってくる。曇った窓越しであるだけにいっそう幻想的な、というより少々不気味さを感じさせるほどの出現である。『歩き方』フランス編の表紙に選ばれていることからわかるように、こればかりはヨーロッパのどこにもないフランス独自の光景なのだ。

観光バスを多数飲み込んだ大型駐車場からは、真上にただちに修道院が辺りを圧して聳えていて、鐘樓の尖塔の先端までカメラに収めようとすればかなり後戻りしなければならない。天を突き刺すこのシンボリックな尖塔がなければ、誰もが要塞と思うことだろう。

『歩き方』にこの街の地図が掲載されていないことを不思議に思っていたが、訪れてみればその謎は直ちに解ける。まず第一にこの狭小な島が「街」と呼べるかさえ定かでないこと。入口の門を抜ければあとは狭い道が修道院に向けて続いているだけで、迷いたくとも迷うことはできない。それでも門入ってすぐのところに案内所が設けられていて、「あんないじょ りょうがえ」との標示が日の丸付きで目に入る。

Grande rue「大通り」とは名ばかりの狭隘な道が土産物屋とレストランで埋め尽くされていることは予想通り。しかしその延びが少なく、あっけなく修道院の入口に達してしまったのは意外だった。増築を重ねた修道院が島全体を占めているようなものだから、商業地区はわずかに残った麓にへばりつくように固まっているだけなのだ。これだけの観光地でありながらホテルの数が少ないのも理解できる。

Mont St. Michel といえば、遠くの海辺から見上げた天を突く威容を誰もが連想する。しかし修道院の外観だけでなく内部も見ごたえがあった。三層からなる（つまりは三階建ての）教会堂というだけですでにして驚異であり、それらがさらに数十の区画に分かれているのだから、迷路を踏み分けてゆくような楽しさがある。

じつはここぐらい建築学の知識があるかないかで充実感の違う教会建築も少ないのだ。最上階の身廊はロマネスク様式でありながら内陣はゴシック様式、鐘楼はネオロマネスク様式でありながら尖塔はネオゴシック様式というように。8世紀に建造が始まって以来、11世紀にロマネスク様式の修道院が作られ始めたものの、15世紀にはその内陣が崩壊。18世紀にはロマネスク様式のファサードがゴシック様式に（今度は意図的に）改造されるなど、この修道院は建築の歴史を一身に背負っている。ぼくには重々しいロマネスク様式のほうがずっと印象に残ったのは、ゴシック様式に見慣れて感動が薄れたせいだろうか。

なかでも美しさで際立っているのは最上階の回廊だろう。緑豊かな中庭を囲んでいるのは、巧みに半分ずつ位置をずらした円柱群。イタリアで見慣れた光景ではあっても、このリズムカルな構成が与える美しさは格別だ。それに、各所から覗ける海の景色も忘れがたい。潮は引いているので周囲一面を薄茶色い砂土が覆い、かなり先のほうまで足を踏み入れている観光客がアリのような小ささで目に入る。

しかし恐れていた時刻は早く訪れた。13h頃には見所一周を終えてしまったのだ。やはり一泊するどころではなく、帰りのバスが出発する16h30までは時間を持て余し気味になる。意外に固い砂浜に降りてしばらく散策し、土産物屋を眺め、まだ昼食を取っていないことに安堵を覚える。先に書いたようにレストランの数も決して多いわけではなく、「A l'étage, vue sur la mer」「二階から海の展望あり」と書かれたところを選ぼうと、聖堂への登り道ですでに決めていた。そしてここがみごとに「当り」だったのだ。

寒くてテラスに出ることはできなかったが、窓際の席からは抜群の海の景色を楽しむことができる。先客は初老の2グループでやはり時間を潰したいのか長居をしてくれ、こちらも1時間半ほど記録のための時間を確保することができた。

食べるものは gigot d'agneau (子羊のモモ肉) で決まり。『歩き方』に「海辺の草を食べて育ち、潮の風味があるといわれる子羊もぜひ試してみたい」と書かれていたからだ。これで夜には海産物が食べられるので絶妙の組み合わせと自画自賛する。そしてフライドポテトとインゲン豆を添えた子羊はかなりの美味。焼きはレアで、甘味を帯びたソースもよく、量もたっぷり。「名物にうまいものなし」の不安は消し飛んでいった。

15hにレストランを出て、その先さほど時間が余ったわけではなかった。1軒だけ見つけた品のよい土産物屋で、思いがけず前滞在地 Quimper の民芸風ランチョンマットを見つける。使うのがもったいないようなかわいらしい一品。ブルターニュ土産はぜひ欲しかったのでこの幸運はうれしかった。先ほどの窓辺から海寄りの城壁を歩く散歩者の姿が見えたので自分も歩きながら海を眺め、最後に残された欲望は絵葉書のように Mont St. Michel の全容をカメラに納めることだけだった。砂浜とのプロポジションが最高になるまで駐車場からできる限り離れ、まずは満足すべきショットを撮影。

Mont St. Michel は再訪するほどではないせよ、生涯に一度は訪れる価値の

ある場所だ。巡礼の地でありながら Lourdes のような抹香臭さは微塵もなく、気楽に中世の雰囲気を楽しめることができる。日本人団体客は異国とは思えないくらい群れていて、「江ノ島通り」では石を投げればそこに日本人がいる。パリから十分に日帰りが可能なので（というより泊り客はまずいないだろう）、うんざりするほど大量に押し寄せるのだ。前々から気づいていたことだけれど、彼らは海外旅行の興奮のせいで声が妙に甲高く、特有の笑い方をし、しきりに咳払いをする。この三つを聞いて振り返れば、間違いなく彼らがいる。

バスは16h30の定刻にやって来て、行きよりさらに少ない15名ほどの乗客を乗せて再び飛ばしに飛ばす。大音声のラジオがかかっているのも Pont-Aven からの帰りと同様。来るときは雨のためにほとんど見えなかった風景が、澄んだ空のもと続々と展開されてゆく。変化に富んだ海岸線、緑の牧草地、畑、牛、それに豚（見間違いではないはずだ）。

しかも既述したように St. Malo の街は城壁外の砂浜に大きく広がっていたのであり、その光景は目を奪わんばかりに美しかったのである。車窓から何度も撮影を試みて失敗したので、ここはぜひバスを降りたあと砂浜に舞い戻って写真に収めねばならない。エメラルド色を取り戻した海、雲、ウミネコ、島々、砂浜に打ち込まれたまま朽ちた何十本もの太い木の杭。前回はやはりこの街の十分の一も味わっていなかったのである。

ホテルに戻り、まったく疲れを感じなかったので少量の洗濯をし、湯をたっぷり満たして入浴。ここ St. Malo の海辺に戻ってから、メガネが曇るまでに砂と激しい潮風に打たれていた。

昨夜の夕食は豪遊してしまったから今宵はやや軽く済ませたい。そのためにはレストランではなく、城壁に面した一軒の brasserie で18ユーロの menu を取るのがいいとすでに決めていた。前菜でカキ半ダースを選ぶこともできる（カキの形容詞に creuses とついているのがおかしかった。「くぼんだ」とい

う意味だから、殻がくぼんでいてそれだけ実が大きいのかといえばそうではない。パリではお目にかからぬ表示なので意味不明）。そしてメインは choucroute de la mer（海産物のシュークルード）。このアルザス名物をぜひ食しておきたかったこともあるし、海の素材を使ってどう調理してあるかも大いに興味があった。

話の種という気持ちでもあったのだが、これがすてきにうまかった。載せられた肴の切り身が三種類（陸揚げによるとの注意書きがある）。キャベツはクリーム仕立てで、ハムのほかにゆでたポテトが入っている。ともかく本場のアルザスものと違って肝心のソーセージや豚肉は添えられていないわけだし、量も殺人的ではなく、満足して食べられたのはご同慶の至りと言うほかはない（といって、食べきれそうなハンパな量ではなかった）。

ちなみにここは、庇に厚く透明な防風ビニールを垂らして覆ったテラスである。防風ビニールは客の出入り口として半分開けられているから、次第に風が吹き込んでくるのは、いかんともしがたい。入浴後の身体の温みと、覚悟しておいた厚着、そしてワインの湯たんぽのおかげで、我慢できる限界というところだろう。長い旅の最後に、長く長くお世話になったテラスで最後の夕食が取れるというのはうれしい。今までの旅が次々と頭に蘇ろうとするが、頭を強く振って思い出すまいとする。泣き出してしまいうに決まっているからだ。

7 パリ再び

今朝の St. Malo は再びご機嫌が悪く、一時は傘もさせないほどの強風が吹き荒れていた。じつは昨夜から帰国便の確認のため航空会社に電話するのに、ばかばかしく手間取っていた。早口の留守電が対応し、掛けなおすべき電話番号をまずフランス語で次は英語で言うばかりだったのだ。エンドレス対応になっていないから三度も掛け直し、ようやくメモしたと思ったら一つ数字を間違っていて、またもやり直し。かくするうちに St. Malo の駅では出発の時刻

が迫り、ホームに駆け込めば二両編成のディーゼル車が灯油臭い匂いを立ち込めさせている。8 席しかない一等車両は満員に近く、二等車両から乗客が入り込んできている。

Rennes 駅ではパリ行きの TGV まで 1 時間以上の待ち。航空会社への電話は今度はばかばかしいほど簡単に終了したのだが、安心するというよりはサービスの悪さに腹が立つ。Rennes は前回やはり St. Malo の帰りに訪れて、ほとんど記憶に残らなかった街である。駅頭に降り立ってはみたものの駅前広場が工事中で、この地方で最大の都市を思わせる要素も、記憶を蘇らせるものもない。

12h 05。ついに最後の旅立ちとなる。二人掛けの席の通路側はすべてスーツ姿のビジネスマンで埋まっていて、ただちに書類を取り出して仕事を始めている。後ろ向きに進む汽車に、まるでパリの磁場へと吸い寄せられてゆく感覚を味わいながら、さて残されたパリの 2 日半をどう過ごすかと思いを馳せる。St. Martin 運河、Gare de Lyon、オルセー美術館はすぐに頭に浮かぶのに、そのあとがとんと出てこないのだ。留学後半の 2 年間アパート暮らしをした Etienne Marcel 地区には三度目のセンチメンタルジャーニーをするだろう（最初の一週間のパリ滞在で真っ先に赴き、さらにもう一度界限を散策している）。しかし前半を過ごしたシテ（国際大学都市）には、はたして再び足を運ぶだろうか。これら二つの旧居に対する思い入れがこれほど違っていたことに、心底驚いている。

かくして車中ではパリ計画に時間を費やしてまったく飽きることがなかった。パリ到着直前に、朝からずっと悪かった天気が雨に変わる。なつかしの Montparnasse に降り立てば歩行困難なほどの強風と雨のために、近くで昼食の bar を探すことを断念。ただちにメトロに向かう。

予約したホテル近くの Odéon 駅はこれまたなつかしい Clignancourt と Orléans を結ぶ路線上にあって、Etienne Marcel、Gare de l'Est（東駅）、Gare du

Nord（北駅）と、思い出深い駅名が並んでいる。メトロの車内の特有な匂いは若い時分からちっとも変わらず、パリに帰り着いた実感を掻き立ててくれる。Odéon は Montparnasse からわずかに4 駅。

オデオン広場の雰囲気も昔と変化なく、カルチェラタンへとまっすぐ北に延びる Monsieur le Prince 通りも、二三度しか訪れたことがない割にはしっかりと印象をつかんでいた。変わったのは日本料理店ばかり3軒も店を構えていたことで、値段の手頃なホテルが並ぶこの近辺に日本人観光客が少なくないのかもしれない。

供されたホテルの部屋は二階で、窓を開ければ隣接する建物との距離はわずかに数メートル。快適な St. Malo のホテルのあとだけに、面積が1 / 4に縮まったのはちょっとしたガリバー体験である。パリの屋根を見下ろすような部屋にはいったいいつ泊れるのだろう。

鍵を預けるとき、フロントの35才ほどの男にこのホテルを選んだ訳を話して聞かせた。ぼくのかつての指導教授がこのホテルが好きで、留学当時アパルトマン住まいだったぼくがここに先生を訪ねて来たことがあると。その先生の専門は何で名前は何かと尋ねられたので、もう20年以上前のことだから知っているはずがないと答えたが、そうやって話しているとなかなか感じのいい男であることがわかった。

ここまで来てしまえば、遅い昼食を取るためには、留学時代に足繁く通ったパンテオン手前のカフェを選ぶしかない。チュイルリー公園の正門前を通過して、ものの10分も掛かりはしないのだ。雨天のせいでテラスのガラス戸を完全に締め切っているせいもあるうが、印象は昔とまったく異なっている。いかにもパリにふさわしい雰囲気だったのに、床もイスも内装もすっかりモダンなものに取り替えられているのだ。そしてなにより、いつもエスプレッソを運んでくれたあの優しくそうな老人（当時から60才ぐらいだったか）の姿が見えない。もしいたら事情を話して心から手を握ったのに。

食べるつもりだったサラダはやめて assiette de saucissons secs を注文する。しかしこれはとんでもない失敗だった。今まで各地のメニューでソーセージの盛り合わせの名を目にしていた、今度もそのつもりで注文したところ、出てきたのはサラミの盛り合わせだ。しかも直径 4 mm、厚さ 2 mm ほどの特大型が 15 切れも並んでいる。じつは saucissons「ソーセージ」に付いている secs「乾いた」なる形容詞が気になりはしたのだが、saucissons secs「乾いたソーセージ」でサラミを意味しようとは。あまりにもうかつなミスであった。

サラミはいくら食べても減らない。これは恐怖の体験である。フランス人はほんとうにこの脂ぎったやつを一人でペロリと平らげてしまうのだろうか。確かメニューには前菜の一つとして載っていたはずだが。

記録をつけているうちに時は緩やかに過ぎてゆく。目の前では男二人、女一人の学生の三人組が話をしている、そのなかの一人は日本でなら今日にでもタレントになれそうな色男だ。留学時代にはこれがぼくの仲間だったのかと、あらためて不思議な思いに捉われる。このあとはメトロに乗って Stalingrad に行き、St. Martin 運河を南下して Gare de Lyon まで長駆するよう計画を立てていた。しかし雨でもあり、時の過ぎ行くままに身を任せる。もう観光旅行からは解放されたのだ。

最後に店主と思しき老婦人に声を掛けて、心にわだかまっていたことを話す。ソルボンヌの学生だった頃、ぼくはよくこのカフェにやって来た。その頃すでに60才くらいの年配の男性がいたのだが、その人を知らないかと。マダム答えて曰く。「私は6年前にこの店を買ったのだけれど、80年代なら Saint-Pierre に違いないわ。ええ、生きてますとも。パリにいたりよそに住んだりしていますけどね」。

長い会話を整理すればそんな具合だ。途中で来客があって中断されてしまったけれど、ずいぶん丁寧に應對してくれて、こちらも長年の宿題を果たせたような気がした。留学時代を髣髴とさせてくれる顔といえば、親友や教師たち

外には、寮の部屋の掃除をしてくれたマダムたちが彼くらいしかいないのだから。

スパッツで足元をしっかり固めているので辛いけど、激しい雨が降り続いている。次に赴くべきはパリの有名な文房具店で、若いときにはよく通った間近の Gibert Jeune。地図、ノート類、絵画材料など探すものは山ほどあり、そこでパリの全体図を買えたのはよかった。最初に購入した区分図と組み合わせれば完璧な資料になる。一方ノート類のよいものは売り切れで、絵画材料に到ってはまるで置いていなかった。とにかく寒く、間近のホテルに一度戻ることにする。

フロントにいつからこんなに寒いのかと尋ねると昨日からだという。部屋で重ね着を済ませ、さてもう一つ大事な仕事はホテルの電話帳を借りることだ。パリでは公衆電話が少ないのみならず（とは言っても東京並みか）いたずらっ子の多いこの地のこと、電話帳が残っている公衆電話などありはしない。なんとか電話帳で二人の旧友の電話番号を検索しなければ、再会の芽は摘み取られてしまうのだ。一人は現在なおパリで活躍中の（ということはネット検索でわかる）美術家 K 君、もう一人は20年前にパリでレストランを買い取って商売を始めたが、現在は消息不明の M 君。

探していた電話帳はフロントの近くにあった。だが pages blanches（職業別）だ。個人の番号を調べたいのだからと尋ねると、「誰かが借りて行って返さなかった」。かっぱらわれたと言えればいいだろう！ 一番いいのは St. Germain 通りの郵便局に行ってみることだと言うが、そこはもう寄ったのだ。心に不安の暗雲が垂れ込め始める。

ホテルを出てまず探したのは間近のオデオン座だった。「探す」という言葉がおかしいほど、それはどこから見てもどーんと聳えている——記憶ではそうであるはずだった。だがしばらく彷徨を余儀なくされたのは、直行する道が微妙にカーブしていて見晴るかせなかったせいと、修復中で前面を白いカバーで

覆われ、遠目には近代建築にしか見えなかったせいだ。オデオン座そのものを見るのが目的だったのではなく、それを目印として思い出深いレストラン La Méditerranée を探し出し、最後の夜の晩餐のためにメニューを確認しておきたかったのだ。オデオン座の位置がわかればレストランもすぐに見つかる。しかしまだ開店前の店先に掲げられたメニューを仔細に検討してみると、若い時分によく何度も食事に来られたと驚くほど値段は安くなかった。

あとはとくに目的もなくセーヌの方向に足を運ぶ。やはりパリは、この河に始まりこの河に終わると言わなければならない。たまたま足を運び入れた l'ancienne Comédie 通り（なんといい名ではないか！）から l'Institut de France（フランス学士院）に抜ける道は、左右に古本屋や画廊が散在してパリの文化が香っている。若いときから大好きだった St. André des Arts 通りと並んで、ぼくが見つけた秘密の小路となろう。どんな小道を辿っても、やはり奇跡の街パリ。

セーヌの岸边に出ると目の前に小さな新しい橋があって、そこから見晴らす軍艦の頭のようなシテ島の景観もすばらしくよかった。遊覧船が白い波を蹴立て、静かに波紋を広げてゆく。あまりにも見慣れた街なので写真はまだ一枚しか撮っていなかったけれど、ここは一つおのぼりさんになって撮影しまくらねばならない。正面のりっぱな建物の何たるかが不明で、地図で確かめて Louvre とわかるなんて！ パリ生活を終えてから時間が経ったものだ。

ここまで来れば、我が旧居の近くでよくお世話になった24時間営業の中央郵便局が目と鼻の先にある。もちろんそこで電話帳を探すためだったのだが――。その先の話はパリの悪口になるから、もう書きたくもない。

Etienne Marcel 通りに入り、今回の滞在で三度目に旧居の屋根裏部屋を仰ぎ、この周辺で夕食を取りたくなる欲望を抑えてメトロ駅に向かう。今宵だけはなんとしても、Gare de Lyon 駅近くの思い出深い中華レストランを探さなければならないからだ。路線図を見れば、Gare de Lyon は Châtelet 乗り換え

で Bibliothèque François Mitterand 方面となっている。そんな路線にはまったく記憶がないので恐る恐る乗り換えると、当時はなかったその線は確かに存在している。なるほどと納得したのは、ホームも車体もすべて新品であると確認したときだ。あのメトロ特有の匂いもこもっていない（ちなみに従来の路線では、車内だけでなくホームにまであの匂いは満ちている。あれはいったいなんなのだろう）。

Châtelet からは長距離を一駅で飛ばし、さて Gare de Lyon 着。変わった——どころではなくまったくわけがわからない。わけがわからないから適当な出口を選んで外に出ると、真新しい高層建築だけが闇を圧している見知らぬ街。最初の一週間の滞在で何度も頭に蘇ったシャンソン “La bohème” を再び口ずさむ。“dont plus rien n'existe” 「もうなにも残ってはいない」の箇所ですきそうになる。

Gare de Lyon 駅の脇は、かつては崩壊しそうな建物がひしめき、小さな食料品店や格安の中華レストランが軒を並べ、狭い通路には黒人・アラブ人ばかりが溢れ返っていた。そのなかでも間違いなく最も汚い中華レストラン、「青田飯店」に最初に連れていってくれたのは、当時勤めていた M 大学の同僚で詩人の A 氏だった。こういう雑多な界隈がなにより好きな彼とぼくはその後何度となく一緒に通い、その間にはわけのわからぬフーテンやら美術家やら料理人やら、金のない日本人の愉快的連中と何人も知り合いになった。飲むのは決まって 1 リットル 200 円ほどの超安ワイン。

レストランが閉まれば誰かのアパートマンに場所を移してさらに飲む。美術家たち 4 人ほどと朝まで口角泡を飛ばして絵画論を繰り広げ、掴み合いの寸前まで行って悄然と帰宅したこともある。そんな “La bohème” さながらの青春を演出してくれたのがほかならぬこの界隈なのだった。20 年前からすでに、再開発のためこの一帯が取り壊される話が進行しており、「夢の跡」を訪ねるためだけのセンチメンタルジャーニーである。それは当初から承知していた。だ

がそれにしてもあまりと言えばあまりの変わりようである。

幸い地図を購入しておいたからよかったものの、もしそうでなければそのまま踵を返してしまったことだろう。人気ない通りはそれほどぼくにはそっけなかったのだ。しかしかつて足繁くかよったのとは180°反対の通りに出てしまったことがわかり、再び駅構内を通り抜けてChallon通りへ。20年の時を経てもなつかしい地名を忘れていないことがうれしかった。

歴史の刻まれた大時計を戴く由緒ある駅舎、あの駅舎を再開発のために壊してしまったのかと、じつはさっき怒り心頭に発していた。しかしパリっ子はさすがに愚かではなく、大時計は今なお時を刻んでおり、駅舎も街へと降りる脇の階段もそのままだった。しかし一帯は広場に姿を変え、間違いなく「青田飯店」があった一角には巨大ホテルNovohotelが聳え立っている。再び“*dont plus rien n'existe*”「もうなにも残ってはいない」を口ずさみ続ける。

“Quand au hasard des jours je m'en vais faire un tour à mon ancienne adresse. Je ne reconnais plus, ni les murs, ni les rues qui ont vu ma jeunesse. Dans son nouveau décor Montmartre semble triste et les lilas sont morts. La bohème, la bohème, ça ne veut plus rien dire du tout.”

「ある日ぼくは昔の住所をふらりと訪れてみた。ぼくの青春を見てくれた壁も通りも、今ではもう見覚えがない。新しい装いのなかでモンマルトルは寂しげだ。リラの花も枯れてしまった。ラ・ボエーム、ラ・ボエーム、それはもうなんの意味もない」。

寒風のなか、ぼくは敢然と歩き始める。「おもしろい。探し出してやろうじゃないか。どこかに場所を換えているかもしれない青田飯店を」。名前が変わっているかもしれない。いつも相手をしてくれたあの店主の娘たちが、別のレストランに嫁いでいるかもしれない。大きな駅だけあってレストラン街の拡がりも広大ではあるけれど、しらみつぶしに所在を確かめようと意気軒昂だった。中華レストランを一軒ずつ確認しながら商店が切れるところまであらゆる

街角を巡り、探索にどれだけ時間を費やしたことが。ついに諦めたときは20h20を回っていた。

昔と同じく数多い中華レストランのなかには、満員の店もあれば客一人入っていない店もある。一番客の入りのいい店を選んで腰を落ち着け、ようやく遅い夕食の態勢に入る。満席のわけだ、時間の経過とともに味がよくて常連が多いことがわかる。特製スープは肉団子、くらげ、野菜、きのこ類がたっぷり入ってなかなかおいしい。ベトナム風春巻きも美味。これだけでかなり満ち足りた腹に、今滞在ではじめて食すカエルを詰め込む。しょうゆ味のソースをとりとからめたその味も、これなら客を呼べると納得できる。

「昔美人」という感じのママに、最後に大事な質問をしてみた。メモ帳に大きく青田飯店と書いて、こういうレストランを知らないかと尋ねたのだ。その店はあったかもしれないが、どういう人が経営していたかは知らない、ママはまず答えた。一帯はすべて取り壊されてしまって、小さなレストランは全部なくなってしまったと。それはこちらとしても20年前から承知の上だが、消息を知る者がいないとは寂しい。25年前からこの店をやっていると言うマダム、ひょっとして怪しげな雑居地帯にあった小さな店など軽蔑していたのかもしれない。

カエルの足の2、3本も残して、腹は満ちすぎるほどに満ちた。かつての定番であった豚肉の安いローストでも焼きそばでもなく、すてきにうまい中華料理を食べてしまった寂しさは筆舌に尽くしがたい。“dont plus rien n'existe”
「もうなにも残ってはいない」。若くはない身に、時はいつも非情だ。

翌日はオルセー美術館に回り、なつかしい印象派の名画たちに再会。ゴッホを見終わってちょうど二時間経過したところで緊張も限界に達する。腹もりっぱにすいてきたので、美術館内に設けられたレストランへ。欲望のままにタルタルを食すか、回数が少なかったフォアグラかで迷い、結局前者はまたの機会

にとっておくことにした。ここの内装は聞かされていた以上に豪華極まりないが、イスが落ち着いた薄緑で簡素な点も美術館にふさわしい。

高級店の出店でありながら、手頃な値段の、それでいて滑らかでこってりしたフォアグラを食べさせてくれる。しかし付け合わせのゼリー状のソースはリングの酸味が利きすぎていて、これを載せてしまってはもったいない。案内嬢はひどく美しかったのに私の係りはフォアグラのように太ったメガネのおばさまで、なんというかまあ、落胆したことも書き添えておこう。前後の席を日本人に囲まれてしまったことも。

ワインを飲めば涙腺が緩み、思い出したくもない旅の終わりを意識させられてしまう。ゴッホの終焉の地 Auvers で旅を締めくくる時間的余裕に恵まれなかったのは、残念極まりない。しかし例によって、少しは心残りがあったほうがいいのだと、思おうとしている。きのうから引き続いて静かな時が流れている。これでよいのだ。

デザートはタルトでもジェラートでもよかったのに、限られたパリ滞在のこと、フロマージュも食べておかねばと——その心の囁きが間違いの元だった。運ばれてきた一品は見たこともない5種盛りの大皿。それぞれ絶妙にうまいのだけれど、これ一皿だけでりっぱな昼食以上の豪華さ（実際、隣席のやたらまつ毛を巻き上げた女性はこれだけ食している。連れの男と英語を話しているが、コーラで食事の趣味の悪さから押すとアメリカ人なのだろう）。かくして口のなかは塩味だらけとなり、ワインをもう一杯追加する羽目に陥る。これで美術館鑑賞の続きができるのだろうか。

食べかけなのに終わったかと問われ、ふと見れば13h40になったレストランは満席に近くなっている。Non とは答えたものの腰が落ち着かない。昼過ぎにはまだ空席だらけだったのに、ヨーロッパ人の食事の時刻の遅さには今さらながら呆れるばかり。

忘れぬうちに書き留めておこう。最初に地上階の印象派を見たあと、Arles

の縁もあって真っ先に駆けつけたかったのはゴッホだった。エスカレーターで最上階に上り、印象派の目印を頼りに一周しても見つからない。係りの女性がいたのに、尋ねかけるのを極力抑えていたのにはわけがある。人にいじわるをしたくてしょうがないという感じの太ったおばさんだったのだ。ゴッホの位置はと尋ねると返事もせず親指で奥を指差す。すでに辿ったところだから「奥？」と念を押すと、こちらの顔も見ず、地上の悪意をすべて背負ったような渋面で軽く頷く。

はじめからのイヤな予感はもちろん裏切られず、もう一回巡ってもそんなところにゴッホがいはいしなかった。さらに一周して途方に暮れ、ふと中間スペースを通り抜けると、さっきの親指とは縁もゆかりもないそこにポスト印象派以降の絵画が展示されていたのだ。「自分の分担以外には決して関わらない」のがフランス人の特質であるが、「自分の分担で知らないことは知ったふりをする」のも特質であったのか（あとで館内図を見ると、「中間スペース」には展望喫茶室と参考室がしつらえられていて、そこで行き止まりと勘違いして何度も彷徨を重ねたのだろう。ちなみに駅舎を改造したこの美術館は特殊な吹き抜け構造をしていて、平面図から想像できる以上に目的の場所を探すのがむずかしい）。

午後一杯を再びオルセー美術館で過ごし、夕刻にメトロの Stalingrad 駅に着く。天気はまた不安定になり、曇り空が広がっている。22年9ヶ月前のあの日のように。あのときは寒い冬で、小さいカフェに入り一杯のコーヒーを飲みながら身体を暖めたものだ。そのカフェを再び見つけ出すことはできなかったけれど。

22年前の「あの日」以来、その後の3年に渡るパリ滞在でもぼくはここに足を運ぶことをタブーとしてきた。そしてぼくはパリ時代の孤独と異邦人感を思い出すとき、いつも、ここを流れるサン・マルタン運河のことだけを考えてきたのだった。今年の一月がそうだったように。今日ようやくにして再訪し、あ

のときの孤独の若干なりとも取り戻せたような気がしているのは、ひとえに40日近く旅を続けてきたおかげなのだと思う。小ざれいな店が増えたとはいっても、ここは、ここだけはぼくの思いが閉じ込められたまま変わらずにいてくれる。

サン・マルタン運河の終点 République 広場に着くと、パリ随一といっているほどの交通量と人出に驚かされる。メトロの路線が五つも乗り入れているせいなのだ。ここからメトロに乗って再び旧居の Etienne Marcel に赴くつもりでいたが、地図を見れば十分に歩いて行かれそう。しかも St. Martin ~ St. Denis ~ Bonne Nouvelle と三つの大通りを結ぶ直線は、なぜかいつも地図を見るたび心に引っ掛かるものを覚えていたのだ。

その理由は St. Martin 通りに入っただけですぐにわかった。来た回数は少ないながらも、この辺りは留学時代の最後に深い印象を与えてくれた界隈だったのだ。不思議な夢を何度か見たことがある。どこかの通りを歩いていて、確かにパリだと感じていながら覚めると見覚えのない街だという夢。ところがここに広がっている風景が、夢の光景と妙に一致しているのだ。あの建物、あの階段。ああ、ここがあの夢の原像だったのかと、何度も目を擦る思いをしたものだ。もちろん地図を片手にした観光客など歩いてはいない。ぼくの思い出だけが詰まったセンチメンタルジャーニー。

St. Denis 通りにはかつて見に行った映画館と、博士論文完成直前に食べに入った安レストランがある。食卓でなお論文を検討しているぼくに愛想のいいウェイトレスが、“C'est fini, la philo!” 「哲学はもうおしまい！」と微笑みながら諭してくれた。映画館はなくなっていたが、レストランのほうはこの辺りと思われる一角に La Criée なる安そうなレストランがあった。今でも記憶しているブルーを基調とした内装とは異なっていたけれど、たぶん間違いはないだろう。

Poissonnière 通りを直角に左手に折れて旧居の方向に向かう。記憶に反して

寂しい通りを抜け、Petits Carreax 通りを進んだ辺りから、前方にすてきに賑わいだ界隈が見えてくる。近寄ってみれば、かつて買い物客として日々足を運んだ Montregueille 通りではないか。旧中央卸し入れ市場に近いためにもともとパリでも有名な商店街であり、思えばぼくもいい界隈に住んだものだ。この通りでの夕食ももちろん魅力的だが、今宵はこらえなければならない。目的地は平行して走る通り、モンマルトルと並ぶ最大の歓楽街 St. Denis 街なのだ。留学時代にはよく足を運んだものであり、太ももを露わにした娼婦の隣で食べたクスクスの味は忘れられない。St. Denis 街でクスクスを！これが本日の夕食のテーマであったのである。

パリに着いて第一日目の午前中にすでに訪れていたのだが、そのときと同様、人通りはかつてに比べて激減している。あの頃は時代が浮かれていたと言うべきなのか、それとも逆に今の時代が沈んでしまったと言うべきなのか。歓楽街が閑散としている時代などロクな時代ではないのだ。

目指したクスクス屋は見つからず、その代わりに安普請の中華料理屋は増えた。昔のうらぶれたクスクス屋を彷彿させるそのなかの一軒に腰を落着けようかと、門構えを写真に収めたりもした。しかしクスクスの魔力は抗いがたく、さらに彷徨を続ける私なのである。

南北に走る St. Denis 通りは大きな Réaumur 通りで分断されており、昔もその先まで足を踏み入れたことはめったになかった。しかし今度はクスクスを求めて北へとさ迷い、いいレストランを見つけることができた。トルコ料理の看板が出ており、クスクスに及ばないとはいえ刺激がありそうではないか。前菜に選んだ soupe de tripes は極上の味。クリーム風味に仕立ててあり、独特の臭みを別にすれば内臓とは思えぬほどあっさりとして、かつ深い味わいが秘められている。tripes（内臓）といえば煮込みか焼き物しか思いつかないのは貧困だと思い知らされる一品。

メインはおなじみのシシカパブで、これも刺激があっておいしい。ただし十

種類ほどもあるメニューのうちから、もっと値の張った凝ったものを選べばよかったとあとで反省。日本では本場のトルコ料理などめったにお目にかかれないのだから。

安い値段ではないので客層は悪くない。というより一風変わった客が目立つ。たとえば向かいのヒゲを蓄えた男は話してみればおもしろそうなクセを持っているし、隣の中年男は芸術家風な雰囲気のを漂わせている。その相手の友人がすっかり泥酔して、ウェイターをからかいながら何杯もコニャックをお代りしているのがまたおかしい。「おれのおごりだ！」などと叫びながら、勘定を済ませているのは「芸術家」氏のほうなのである。パリの夜を経験した人なら誰も知っているように、この街で泥酔者はほんとうに稀にしか見ることができない。

最後に失敗談。例の極上の内臓スープを堪能したあと、ウェイターになにか話し掛けられ二度聞き返し、向こうが諦めて笑いながら去って行った。“Plu”「気に入った」という最後の一語が頭に蘇ったのは、いったいそれからどれだけ経ってからだろうか。「味はいかがでしたか」と聞いてくれたのだ。この手の失敗は留学時代のドイツで、やはり最後の“Geshmäckt”が聞き取れずに曖昧な笑顔しか浮かべられず、あとあとまで後悔を残して以来だ。今回はとくに、問われるまでもなく「とてもおいしかった」と激賞してあげただけに、こういう失敗はいつまでも心に引っ掛かる。

再び St. Denis 街を抜け、Les Halles からメトロに乗ってホテルに戻る。帰り着いたのは遅くかつ妙に興奮して寝付けなかったため、L'Officiel de Paris（パリの情報誌）など眺めて就寝は1hを回る。パリに戻って、今までの生活ペースがすっかり日本式に崩れてしまったわけだ。

浅い眠りから覚め、時計を見てぶっ飛んでしまった。9h45！ 昨日の長駆で身体は泥のように疲れている。連泊なのだから疲労を癒すための遅起きはむ

しろ歓迎とはいっても、通常どこのホテルでも10hには朝食時間が終わってしまう。あわてて髪を撫でつけ、服を着てフロントに降りる。食事係が帰ってしまったから別にかまわれないと言われて食堂に赴くと、掃除婦なのだろうか bonjour も言わぬ無表情な太った女が無愛想に給仕をする。ぼくの直後に英語を喋る3人グループが同じく遅れてやって来なかったら、なにもかも飲み下さなければならなかっただろう。

シャワーを浴び、明日帰国のための最後の準備をして、ホテルを出たのは11hを回っていた。Grand Palais で同時開催されているゴーギャン展とヴィイヤール展を見るために、きのうとまったく同様サンジェルマン大通りを西進する。このままセーヌまで直進するコース（これは留学時代にも試みたことがない）の魅力に駆られつつも、サンジェルマン教会の手前で St. Benoit 通りを右折する。美術学校周辺で画材を買う目的もあったけれど、結局ぼくはこの境界がどこよりも好きなのだとは今回はっきりわかった。店を覗き、通りを歩いて雰囲気に触れているだけで幸福になれる。

Jacob 通り、l'Université 通りと西進し（これはサンジェルマン大通りと北側に平行して進むコースとなる）、その間にももしろい光景に出会った。車道がひどく渋滞しており、おなじみのクラクションが鳴り止まない（まことパリっ子の警笛の鳴らし方は日本の比ではないのだ）。渋滞の先頭まで来てこの騒ぎの理由が飲み込めた。車庫から出てきた車と直進してきた車が、出会い頭に衝突したらしい。車体がへこむ程度の軽い事故ではあったが、Police! などと叫んでいちは殺気立っている。

適当なところでセーヌ川に右折すると、再びオルセー美術館の手前に出てしまった。この美術館の遠景は撮影しそびれていたもので、これさいわいと大通りを挟んでカメラに収める。あとは川沿いを西へ進み、パリで一番豪壮なアレクサンドル三世橋を渡って右岸に渡る。公園の樹々の葉が、黄色い秋の装いをまとったパリの姿を見せてくれた。

Grand Palais ではまずヴイヤー展をみたあと、係員に所在を教えてもらった brasserie に赴く。この辺りでたった一軒の店とあって、14h30を回っても食事客で溢れている。最後の昼食こそタルタルを食べるのだと固く決意していたので、席に立ったままでメニューに目を走らせてきくと——ない！ 何度見回しても——ない！ 文字通り臍を決していたから、この空腹を抱えたままで当てのないグルメの旅を再開せねばならないのかと、絶望的な気持ちになる。しかし思い余ってウェイトレスに尋ねると、「ある」。安堵より怒りが先立つではないか。

昼食ゆえもう一品は注文せず、その代わりにビールのあとのワインはボルドーの高級品をおごり、これはコクがあつてうまかった。場所柄からして客層も高く、内装もパリ風にしゃれている。記憶すべき名店での至福のひとつ。

Grand Palais に戻ってゴーギャン展を見終わると、もう予定はすべて消化してしまったことになる。さてパリ最後の夕べをどこで送るか。先に brasserie のありかを尋ねたとき、シャンゼリゼまで出るのも一つの手だと教えられていた。シャンゼリゼか。留学時代にはパリに着いて翌々日ぐらいには真っ先に訪れながら、その後はよほどのことがない限り足を踏み入れたことがなかった。そのくらい興味の持てない地区ではあるけれど、最後を飾って訪れてもいいかもしれない。今回の最初の滞在でタブーのエッフェル塔にも登ってしまったことだし。

枯葉の公園を抜け、じつに久しぶりに見るシャンゼリゼの並木道は、くやしいことにひどく美しかった。観光客となって写真を撮ることにしよう。カフェのテラス、ギフトショップ、車の波、不思議に緑を残している樹々の葉、凱旋門。さすがに世界中の人々の夢を掻き立てる不滅の並木道だ。エトワール広場に到って、ほんの少し Foch 通りに右折する。蘇るかつての痛み。

今日の締めはトロカデロ広場となんとか決めて Kleber 通りを辿る。留学時代の思い出に満ちた地であり、今回の最初の滞在で、最終日に夕食を取った

場所でもあったからだ。その後のことを詳述するのはやめておくが、結局トロカデロ広場での夕食は諦め、サン・ミッシェルまでメトロに乗り、そこからOdéonまでのあいだで海鮮レストランを探すことに予定を変更した。ライトアップされたエッフェル塔に最後の別れを告げる。

サン・ミッシェルのメトロ駅のある St. André des arts 広場を夜通りかかるのは、たぶんはじめてだったろう。何軒ものレストランに囲まれていて非常に雰囲気がいい。幸運なことにそのわずか二軒目で、適当な値段で海鮮を供するすてきなレストランを見つけることができた。内部は想像したよりずっと高級でありながら、値段はトロカデロ広場よりはるかに安い。「名所付加価値税」が取られていないからだ。その利を活かして、カキとしては高級な部類に入る fines de claire の中サイズを食したが、これはとくに美味ではなかった。

メインは brochure de saumon で、日本風に言えば大ぶりのサケの塩焼きということになってしまう。塩気はほとんどなく、パセリと香料のほかになにか複雑な味わいを舌に感じるがその正体はつかめない。Bordeaux で食したサケのタルタルは話の種で終わったけれど、こちらはなかなかの一品だった。付け合せはなぜかタイ風スパゲティーで、小エビ、刻んだきゅうり、にんにくに、これぞタイ風という香料が利かされている。いずれも量が適当で、いつもの食後酒の代りにデザートのプロフィトロール（美味！）を食して締める。

最後の夜というのに実感はほとんど湧かない。明朝の7h起床を考えると、一限からの授業を控えた前の晩と同じで、夜更かしをする気にもはしゃぐ気にもなれない。ここからホテルまではわずか数百メートルの距離だ。Monsieur le Prince 通りに入ると、昨夜の帰り道では賑わってぼくを惹き付けた終夜営業の bar に人影はなかった。

翌朝、出発の3時間前に空港に着く予定をさらに1時間繰り上げ、7hに起床したのに、ウソのように時間は足りなかった。空港行きのメトロはどういう

わけか Gare du Nord 乗換とばかり思い込んでいたせいもある。そのためにどれだけ青ざめ、余分な汗をかいたことか。そして「難民」「人権」「人間の尊厳」というような言葉ばかり思い出させられた空港窓口での行列。信じられないような係員のいい加減さ。残金のほとんどを費やしてブルゴーニュの名醸酒一本を購う暇しか残らなかったことを呪うべきか。はてまたそれだけの余裕が残されたことに感謝すべきなのか。

だがそんなことの一切を記録しても、なにになろう。旅は果てたのだ。最初なら教訓になろうことも、今となってはその価値を逸している。きのうはなぜパリを去らねばならぬのかと怒りばかり覚えていたのに、今日は日本からあまりに遠い街を愛してしまった哀しみに浸る。パリこそやはり日本以外で「住む」ことのできる唯一の奇跡の街だったのだ。

機内に乗り込むと、隣の座席にいたのは若いアジア人女性だった。飛行機が緩やかに動き始めると、どのような事情があるのだろう、彼女はしきりにハンカチで目を拭い始める。ぼくは彼女に悟られぬよう、声を殺して号泣をこらえる。涙が頬を濡らし続ける。

飛行機が全力疾走を始めたとき、魂と化した肉の一部が引き千切れてこの地に埋められたような気がした。「魂の散骨」という言葉をぼくは思っていた。